

北海学園・レスブリッジ大学

学生交換事業[夏期研修]

25 周年記念誌

1986~2010



北海学園・レスブリッジ大学
学生交換事業[夏期研修]

25
周年記念誌
1986~2010

目次

Contents

序文・謝辞	3
祝辞	
北海学園大学 学長 朝倉 利光	4
レスブリッジ大学 学長 Michael J. Mahon, Ph.D.	5
北海道カナダ協会会長 藤田 恒郎	5
語学研修事業の概観	6
協定書・語学研修の概要	9
交流協定書	9
活動の詳細 [派遣事業]	11
募集と事前研修	11
レスブリッジ大学での研修	13
語学研修報告会(2010年度)	13
[受け入れ事業]	14
構成図	14
ホストファミリー・協力学生の募集とオリエンテーション	14
日程表(2007年度)	16
[引率者一覧]	17
派遣引率者一覧	17
受け入れ引率者一覧	18
派遣事業に参加して	19
鳥谷部 寿人／児玉 友希子／高田 倫志／宇野 美穂	
北守 有沙／大江 敏美／Mark Matsune／日置 奈津子	
受け入れ事業に参加して	24
中川 かず子／Shelley Scott／Naomi Snelgrove	
Dayna Daniels／Edward Jurkowski／Lance M. Grigg	
齋藤 かず子／白鳥 亜矢子	
2010年度派遣事業報告会	29
ブログ Hokkai Gakuen / U of L Exchange 2010	31
2010年度事業成果報告 清永 麻衣子	32
写真で振り返る25年	34
資料	44

序文

Foreword

この記念誌は1986年に始まったレスブリッジ大学との夏期語学研修・交流の報告である。基本的資料は学校法人北海学園編集による『30周年記念誌』から学生交換事業の部分を抜き出したものとなっているが、さらに北海学園大学が制定した留学関係の各種規程、実施した派遣事前研修、ホストファミリーオリエンテーション、報告会記録などを加え、北海学園大学とレスブリッジ大学の25年間にわたる学生交換プログラムの記録としている。

謝辞

Acknowledgments

この25周年記念誌を作成するにあたり、研修に参加した卒業生、在學生、ホストファミリー、教職員、学園事務局、北海商科大学、レスブリッジ大学の皆様にご協力を頂きました。お礼申し上げます。

北海学園大学 平成22年度レスブリッジ大学専門委員会
委員長 リチャード・キザー

北海学園・レスブリッジ大学 学生交換事業25周年を祝う



北海学園大学 学長
朝倉 利光

北海学園大学とカナダのレスブリッジ大学で行なわれている学生交換事業の夏期語学研修プログラムが、25周年を迎えられ、それも25年の活動を多くの成果を得て迎えられること、心からの賞賛と祝福を申し上げます。特に、本事業の推進にかかわってこられた教職員の皆様の御尽力に対して感謝する次第です。

この25年間は、世界的なグローバル化が進展した時代でありました。1980年代末頃から、科学技術の進歩と情報革命に伴い、地球規模の情報化が進展し、それに伴ってグローバル化が始まりました。それ以来、20年間、「ヒト、モノ(カネ)、情報」が国境を越えて移動しており、社会・経済・文化において世界的グローバル化が進みつつあり、現代はまさにグローバル化の時代になっております。

このグローバル化が始まる頃から、北海学園とレスブリッジ大学との交流が始まりました。実際には、1981年に北海学園とレスブリッジ大学との間に結ばれた交流提携に基づき、1986年に学生交換事業について覚書が交わされたことに端を発しています。それ以来、隔年ごとに相互の大学から派遣する形で、これまでに北海学園大学から169名、レスブリッジ大学から167名の学生が参加しております。

この学生交換事業には、二つ使命があるように思います。一つは“語学研修”を通しての英語力の養成であり、もう一つはいろいろな“交流体験”を通しての国際性の涵養です。前者の使命は、外国で勉学することで、自ら学ぶという積極的な姿勢が芽生え、そして自ら考え、自らの行動に責任をもつことができることでしょう。後者の使命は、学生や教職員、そして多くの人々との出会いや共同生活があり、多様な価値観を交流体験することができることです。この価値観は、人間の生きる原点を見直し、世界のさまざまな社会や考え方を共有する知性となり、国際性が涵養されます。語学研修を通して、学生たちは主体的な勉学の姿勢を築き、英語力を高め、異文化理解の能力を養い、国際性を涵養し、グローバル化時代において国際的に活躍できる人間として成長します。

語学研修事業は、参加する学生たちにとって、グローバル化時代における国際性の涵養と地球市民となるための第一歩となります。将来へ向かって、さらに本事業が発展し、本学における国際性涵養への生きた教育基盤となることが期待されます。

The 25th Anniversary of a Strong Partnership

President & Vice-Chancellor
The University of Lethbridge

Michael J. Mahon,
Ph.D.

Hokkai-Gakuen University and the University of Lethbridge have enjoyed a strong partnership that has grown and developed on many fronts. One of the programs we are most proud of is the very successful student exchange between our two institutions that will mark its 25th anniversary next spring. This student exchange reflects an important relationship for students, faculty, and the greater community who become involved in many ways. It is the longest standing and certainly most successful exchange partnership at our university. In fact, we have yet to find a longer exchange relationship between Canada and Japan in this country. Over 400 students have participated in the exchange. Lasting friendships have developed along with a greater understanding between our cultures. Many University of Lethbridge students have returned to Japan over the years and all of them have a greater appreciation of such an important nation.

The Japanese word “gambate” summarizes how I view both the past and the future of this exchange. Gambate means “do your best” or “go for it”. It is a call to action for our future students who can gain so much from this experience. The past tense translates to “well done” a phrase that is applicable to our faculty, staff, and students from Hokkai-Gakuen University and the University of Lethbridge who have created a successful and valuable program that has thrived for 25 years and will continue to be important in the years to come.

5

「北海学園・レスブリッジ大学 学生交換事業夏期語学研修」 25周年記念誌編集に寄せて

北海道カナダ協会会長
藤田 恒郎

この度、北海学園大学におかれましてはレスブリッジ大学との学生交換事業25周年という記念すべき年を迎えられましたこと、心からお慶び申し上げます。

急速に進展するグローバル化の中で各分野における国際的交流が飛躍的に深まってきておりますが、中でも国境を越えた人、特に若者達の交流が最も必要であることは言うまでもありません。この意味で、貴大学が早くからこの学生交換事業を通じてレスブリッジ大学との相互理解および友好親善のため、多くの交流実績を残されてこられましたことにつき深く敬意を表したいと存じます。

この学生交換の事業がさらに永く継続されると同時に、貴大学のますますのご発展を心から祈念申し上げ、25周年のお祝いのご挨拶と致します。

はじめに

1986年から始まった本学とレスブリッジ大学との25年間の語学研修の歴史について報告する。正式名は「北海学園・レスブリッジ大学 学生交換事業 語学研修(海外研修)」である。偶数年に北海学園から英語研修のために学生を派遣し、奇数年にレスブリッジ大学より日本語研修の学生を受け入れてきた。毎年15名から20名の学生を派遣し25年の歳月はその数を169名とした。また受け入れたレスブリッジ大学からの学生は167名となった。受け入れにかかわったホストファミリーは153家族である。25年間にはナイルウイルス感染(2006) 予防のため虫除け薬剤を用意したり、新型インフルエンザの発生(2009)でホームステイを急遽研修施設宿泊に変更したり緊張が走る場面もあった。幸い大きな事故もなく無事に25周年を迎えられるのも、この事業に係わった多くの方々のご尽力の賜物と感謝している。

語学研修事業の趣旨と目的

この事業は、学校法人北海学園とカナダ・レスブリッジ大学との協定に基づき、双方の教育機関の対等な協力によって、教育研究の国際交流を促進し、国際理解を深めるとともに、日加両国の親善をはかり今後の産業経済・学術文化の国際交流の場で活躍する人材を育成することを主な目的としている。

語学研修が始まるまで 大学交流協定の提携

レスブリッジ大学との交流は1980年のアルバータ州と北海道との姉妹提携締結に発している。北海道は1970年代の初めから事前条件の類似した北方圏との交流を提唱し、アルバータ州とは、スポーツ交流、農業技術者交流、青年・女性派遣などの交流を進めていた。それらを土台に、1980年に北海道とアルバータ州との姉妹提携が調印され、北海学園大学の森本正夫理事長もこの姉妹提携調印団の一員だった。森本理事長はカルガリー市での調印式後、南部のレスブリッジ市に立ち寄り大学関係者と懇談をした。その折にレスブリッジ大学側から大学間交流への強い意欲が示されたという。この訪問直後に、森本理事長と当時の寺田北海道副知事のもとにレスブリッジ大学から教員及び学生の交流を要請する手紙が届く。そうした要請を受けて、翌1981年に森本理事長が再度レスブリッジ大学を訪問し、北海学園とレスブリッジ大学との交流提携を結んだ。森本理事長はレスブリッジ大学訪問帰国報告で当時を振り返り、「対等交流を原則として、北海道とアルバータ州の協力ののもとに、北海学園とレスブリッジ大学との交流提携が成立した」と記している。

語学研修事業担当委員会の構成

当初、この事業は北海学園国際交流委員会のもとにレスブリッジ大学交換学生派遣・受け入れ協議会を設置し、北海学園大学及び北海学園北見大学(後に北海商科大学)の実行委員会が実施していた。その後は、北海学園大学国際交流委員会専門委員会の一つであるレスブリッジ大学専門委員会が北海学園大学実行委員会となり、学園事務局と北海商科大学実行委員会と協力して合同委員会を設置し行っている。

留学に係わる諸規定の整備

1985年に「国際交流委員会規定」が施行された。本学の教育・研究に関する国際交流を円滑に行うため、専門委員会を置くことが定められた。2002年には「海外留学規定」が設けられ、学生が留学し留学先で履修した単位は、学生の申請により教授会の議を経て本学において習得した単位(「海外文化」など)としてみなすことができることになった。2007年には「北海学園における国際交流に伴う危機管理規定」が施行され、国際交流を推進する過程において発生する様々な事象に伴う危機に迅速かつ的確に対処するため、その危機管理体制、対処方法に関する必要な事項が定められた。本学の国際交流を進める際の教職員及び学生の安全の確保を図ることが確認された。

レスブリッジ大学

レスブリッジ大学は州立大学で、レスブリッジ市内では唯一の総合大学である。カナダの大学ランキングを掲載している雑誌、Maclean'sによると、2010年度の学部教育に重点をおいている大学の中では第4位に位置している。Arts & Science (教養), Management (経営), Fine Arts (芸術), Education (教育), Health Science (健康科学)の5学部で構成されており、学生数は約7,000人で、学生はアルバータ州及び州外の各地から集まっている。留学生も日本を含む約40カ国からきている。

■レスブリッジ市の位置



■レスブリッジ大学キャンパス風景 (「レスブリッジ大学語学研修2006(交換学生募集要項)」より)



1st Choice Savings Centre for Sport and Wellness



学内掲示板



カフェテリア



図書館PCブース



Student Union Building

■レスブリッジ大学キャンパスMAP



レスブリッジ市と日系市民

レスブリッジ市はカナダ西部の交通の要衝であり最高品質の小麦を生産する穀倉地帯として知られる。カルガリー、エドモントンに続くアルバータ州第3の都市で、人口は約7万人。カルガリーから210キロ南東に位置し、100キロ南にはアメリカ合衆国の国境(モンタナ州)がある。早くから移住したオランダ系市民が灌漑に力を入れたので市街地は緑におおわれている。郊外に出ると地平線まで畑や牧草地が広がり、のんびりと草を食む牛の群れが見える。気候は内陸型で雨が極端に少なく、夏は摂氏35度まで上がる。冬は積雪は多くないが寒暖の差が大きい。マイナス30度以下になった翌日にシノック(フェーン現象)と呼ばれる風が吹き気温は一気に零度まで上がることもある。

世界から多数の民族が集まった都市である。市内や周辺地域に日系人も多く住んでおり、日加友好日本庭園、お寺、日本食レストラン、日本食品店がある。レスブリッジ市を含む南アルバータの日系人の多くは太平洋戦争の勃発後、カナダ連邦政府の方針でカナダの太平洋沿岸地域から内陸部へ強制移動させられた人々やその子孫である。戦後の移住者も含め現在レスブリッジ周辺には数千人の日系人が住んでおり、農業その他で市に貢献している。また、北海学園との交流プログラムでも開始当初から様々な面で協力を頂き大学間交流が発展してきた背景には彼らの積極的な協力があるといえる。

■市の紋章 Coat of Arms



交流協定書

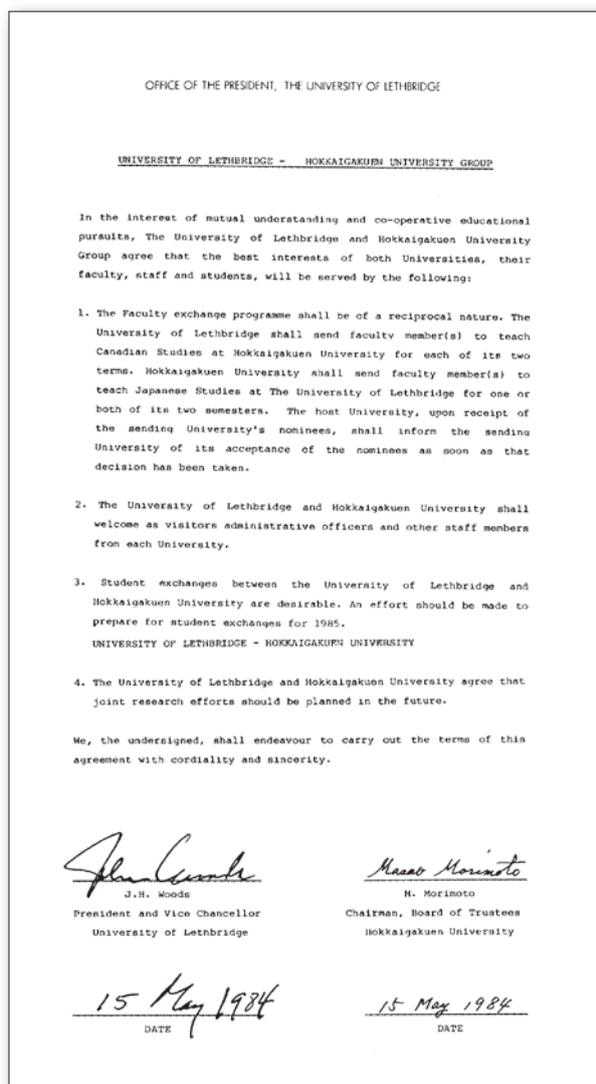
北海道がアルバータ州と姉妹州の協定を結んでから北海学園との交流が始まり、交流に向けての覚書などの数々の資料が残っている。その中に1984年5月にレスブリッジ大学のウッズ学長と学校法人北海学園森本理事長が調印した覚書があるので紹介する。この第3項には学生交流について以下のように記されている。

3. Student exchanges between the University of Lethbridge and Hokkaido University are desirable. An effort should be made to prepare for student exchanges for 1985.

その後、1985年秋、北海学園の創基百周年記念式典に当時のウッズ学長が来訪されて学生交換プログラムが急速に具体化した。その結果1986年から北海学園の学生が、1987年からレスブリッジ大学の学生が、隔年で相互に訪問・研修することになった。

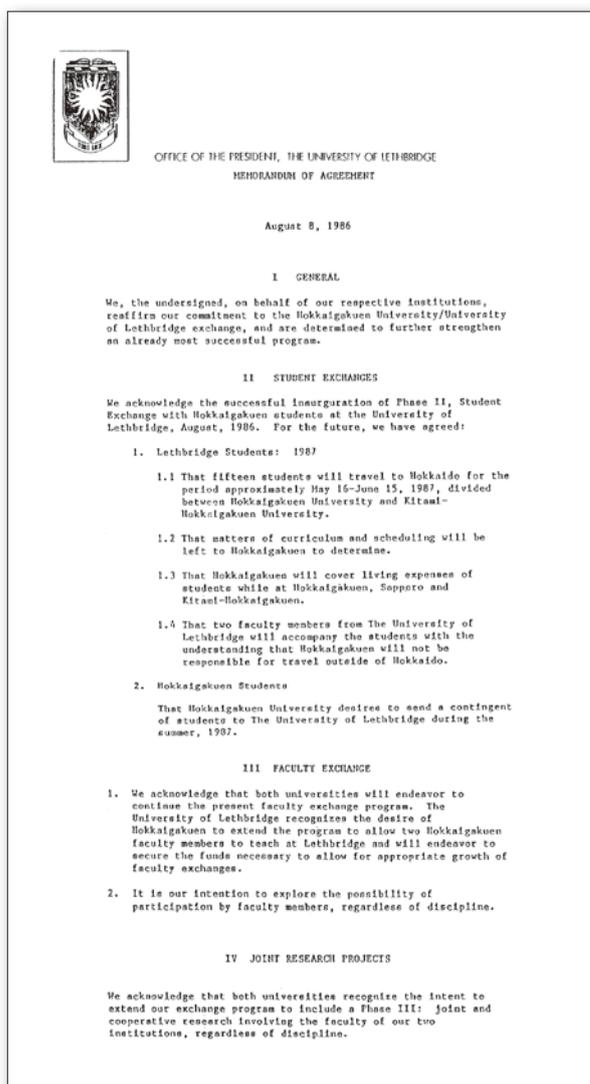
語学研修にかかわる最近の協定書は、2000年に森本正夫理事長とウィリアム・H・ケイド学長により署名された「交流協定書」である。2項に学生交換にかかわる事項が記述されている。

■1984年の覚書



■1986年の協定書

(1987年にレスブリッジ大学学生が北海道で研修する旨が記されている)



■2000年交流協定書(英)

EXCHANGE AGREEMENT
between
HOKKAI-GAKUEN
(Hokkai-Gakuen University, Hokkai-Gakuen University of Kitami,
and Hokkai-Gakuen Junior College of Kitami)
SAPPORO, HOKKAIDO, JAPAN
and
THE UNIVERSITY OF LETHBRIDGE
LETHBRIDGE, ALBERTA, CANADA

Subject to ratification by the Board of Governors and appropriate councils of each institution, that Hokkai-Gakuen and the University of Lethbridge agree to work towards developing and maintaining an exchange programme of faculty and students of both institutions.

- The faculty exchange programme shall be of a reciprocal nature. In each semester (Fall and Spring) the University of Lethbridge shall send one professor to teach a course in Canadian Studies, including Canadian life and culture, at either Hokkai-Gakuen University and/or Hokkai-Gakuen University of Kitami. The Japanese exchange professor, who may be from either Hokkai-Gakuen University, Hokkai-Gakuen University of Kitami, or Hokkai-Gakuen Junior College of Kitami, shall teach in the Interdisciplinary Studies-Japanese Culture program, including Japanese conversation and Japanese life and culture, at the University of Lethbridge. For the purpose of definition the exchange year shall be January 1 to December 31 of each year, however, in each institution the programme shall conform to the respective academic year (fiscal year). It is further intended that the exchange of faculty will continue in the same format on an annual basis.

The financial and logistical arrangements include:

- The host institution shall bear the costs of a living allowance, housing and transportation to and from the exchange site for the visiting professor.
- The home institution shall provide benefits (including medical coverage) for its professor.
- The scheduled teaching load for each professor shall be not more than eight (8) hours each week. For the University of Lethbridge professor in Japan the teaching assignment may be at either Hokkai-Gakuen University (Sapporo) or Hokkai-Gakuen University of Kitami (Kitami), or both.
- If requested and if the professor is qualified, each visiting professor may be requested to assist with out-of-class or after school activities, such as clubs, teams and cultural events.

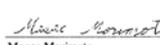
- Exchanges of students may be arranged upon agreement of both institutions and such exchanges would be of a reciprocal nature. It is intended that both institutions shall exchange students on the basis of every other year. The student exchange programme would involve students of the University of Lethbridge, who would be the Canadian exchange group, and students of Hokkai-Gakuen (Sapporo and Kitami), who would comprise the Japanese exchange group. For the purpose of definition the exchange year shall be January 1 to December 31 of each year, however, in each institution the programme shall conform to the respective academic year (fiscal year). It is further intended that the student exchange programme would continue in the same format on an annual basis.

The financial and logistical arrangements include:

- Each institution shall bear the costs of transportation to and from the exchange site and medical coverage for its own participants.
- The host institution assumes all costs for the exchange participants, such as language classes, accommodation, meals, weekend trips, transportation, etc. and the exchange participants shall be responsible for their own spending money during the visit.
- The visit of each group to the other exchange site would be of approximately three (3) weeks duration. It is proposed that the University of Lethbridge students would visit Kitami and Sapporo for three weeks sometime within the period from early June to a time not later than the beginning of Summer Holidays, which usually begin after the third week in July. The Hokkai-Gakuen students would visit Lethbridge for three weeks sometime within the month of August, to end no later than August 31st.
- The number of students in each exchange group may be as high as twenty-five (25) students.
- There shall be a minimum of one (1) chaperone for each fifteen (15) students and a maximum of two chaperones for whom accommodations will be provided during each visit.
- The hosting institution shall provide homestay accommodations or other suitable housing for the visiting students and chaperones and shall be responsible for the planned activities arranged during the duration of the visit to the hosting site.
- Special excursions, such as on the journey to and from the hosting site, shall be born by the visiting exchange institution.

- Changes to the format of the faculty exchange or student exchange shall occur only with the agreement of both Hokkai-Gakuen and the University of Lethbridge.
- Both institutions will endeavor to investigate the feasibility of long term exchanges by students.
- This exchange agreement may be terminated at any time by either Hokkai-Gakuen or the University of Lethbridge upon nine months written notice.

IN WITNESS WHEREOF, the parties hereto have made out the written Agreement in duplicate with their signatures duly affixed, and both parties shall retain one copy each.


 Masao Morimoto
 Chairman of the Board of Governors
 Hokkai-Gakuen
 Date 14. Oct. 2000


 William H. Cade
 President and Vice-Chancellor
 The University of Lethbridge
 Date 14 Oct 2000

■2000年交流協定書(日)

交 流 協 定 書

学校法人北海学園
北海学園大学
北海学園北見大学
北海学園北見短期大学
(日本国北海道札幌市)

レスブリッジ大学
(カナダ国アルバータ州レスブリッジ市)

学校法人北海学園とレスブリッジ大学は、両教育機関の理事会及び互いの総務課長により批准されることを前提とし、次に掲げる両校の教員交換事業及び学生交換事業を発展・継続させる目的のため締結することに同意する。

- 教授交換事業は、互恵的性質を持つものである。毎学期(春季・秋季)に、レスブリッジ大学は教授1名を、北海学園大学及び(または)北海学園北見大学へ派遣し、カナダの生活と文化を含むカナダコースの教育に従事させる。また、北海学園大学、北海学園北見大学、或いは北海学園北見短期大学の交換教授は、レスブリッジ大学において日本語能力及び日本の生活と文化を含む日本文化プログラムに関する学際的研究コースに従事する。当該年度の定員枠として、交流年度を毎年1月1日から12月31日までとするが、実態にあたっては両教育機関ともそれぞれの学年度(予算年度)を基準とする。さらにこの教授交換事業は、今後、同様な形態で毎年継続される。

経費及び後方支援業務については、下記の事項を包括して取り決める。

- 交換教授を受け入れる教育機関は、その教授の滞在費、住居、並びに訪問地までの送迎にかかる往復旅費について、これら経費を負担するものとする。
- 交換教授を派遣する教育機関は、その別に対し総付手当(医療費の補償を含む)を提供するものとする。
- 交換教授の担当講義科目は送迎期間を含まないものとする。レスブリッジ大学交換教授の日本における担当期間は、北海学園大学(札幌)または北海学園北見大学(北見)、或いはその総務課長に依り行われるものとする。
- 懸念がある場合、またはその教授に資格がある場合には、交換教授は講義外や講義後の読書会・クラブ、チーム、文化行事等の読外活動に対する協力を依頼されることとなる。

- 両教育機関の合意に基づいて学生交換の準備を行うこととするが、このような交換事業は互恵的性質を持つものとする。両教育機関は、学生交換事業を隔年で実施するものとする。学生交換事業における学生は、レスブリッジ大学の学生をカナダ交換グループとし、学校法人北海学園(札幌・北見)の学生を日本交換グループとする。当該年度の定員枠として、交流年度を毎年1月1日から12月31日までとするが、実態にあたっては両教育機関ともそれぞれの学年度(予算年度)を基準とする。さらにこの学生交換事業は、今後、同様な形態で毎年継続される。

経費及び後方支援業務については、下記の事項を包括して取り決める。

- 学生を派遣する教育機関は、参加学生の派遣地までの送迎にかかる往復旅費及び医療費の補償について、これら経費を負担するものとする。
- 学生を受け入れる教育機関は、語学研修費、宿泊費、食費、週末旅行費、通学費等を負担し、交換参加学生は、訪問中に必要となる個人の経費を負担する。
- 交流参加学生が派遣地へ滞在する期間は、約3週間とする。その期間については、仮定として、レスブリッジ大学の学生の北見・札幌訪問を6月上旬から連年7月第3週から始まる夏季休暇開始前までの期間とする。また、北海学園の学生のレスブリッジ訪問は8月中とし、8月31日までを終了するものとする。
- 各交換グループの学生数は最大で25名までとする。
- 各交換グループの15名の学生に対し専任で1名、最大で2名までの引率者が同行し、引率者の訪問への滞在については受け入れ機関より提供される。
- 学生を受け入れる教育機関は、訪問する学生及び引率者のためにホームステイ家庭または他の適当な滞在先を提供し、その滞在中の読外活動を計画・準備し、その費務を負担する。
- 派遣地までの送迎または送迎において特別に企画される旅行については、学生を派遣する教育機関が負担する。

- 教授交換事業または学生交換事業の形態を変更する場合は、学校法人北海学園とレスブリッジ大学の合意によってのみ行われる。
- 両教育機関は、学生の長期交換事業の可能性を調査する努力をする。
- 本文協定書は、9か月間の発効をもって学校法人北海学園またはレスブリッジ大学からの書面による申し出があった場合、随時締結することができる。

本文協定書の証として、両当事者は署名した協定書2通を作成し、双方は各2通を保持するものとする。


 学校法人北海学園
 理事長 森 本 正 夫
 日付 平成12年(2000年)
10月14日


 レスブリッジ大学
 学長・副学長 ウィリアム・H・カイド
 日付 14 Oct 2000

語学研修：活動の詳細

派遣事業

[募集と事前研修]

参加学生の募集が5月中旬まで行われる。5月末に選考試験(英語筆記試験・面接)が実施され、参加学生を決定する。参加学生は6月から7月に4回開催される事前研修会に参加し、レスブリッジ市、大学、ホームステイについての基礎知識、交換事業に対する心構えについて英語および日本語で講義を受ける。英語による自己紹介、日常会話の練習も行う。レスブリッジ市及び大学で行われるパーティーでのお礼の言葉など、分担を決めて練習する。出発直前には理事長、学長も出席して結団式を行い、大学の代表として交流事業に参加する自覚を促す。

■事前研修日程①

平成22年度レスブリッジ大学学生交換事業 夏期海外研修(派遣)事前研修会スケジュール

[第1回事前研修会]

日時：6月12日(土) 12:40～(2時間程度を予定)

場所：D50教室(7号館)

- ・委員長挨拶
- ・引率者紹介
- ・米坂先生からの宿題(Home stay tips)
- ・University of Lethbridge Exchange Assignment
- ・参加者への初歩的心得(キザー先生)
- ・英語によるコミュニケーション(キザー先生)
- ・グループの発表(引率者)
- ・パスポート取得について
- ・今後の予定について
- ・その他

[第2回事前研修会]

日時：6月19日(土) 12:40～(2時間程度を予定)

場所：D40教室(7号館)

- ・渡航手続きについて(JTB)
- ・宿題答え合わせ
- ・レスブリッジ大学の概要他(マツネ先生)
- ・その他

[第3回事前研修会]

日時：7月3日(土) 12:40～(2時間程度を予定)

場所：D40教室(7号館)

- ・Homestay tips・ホームステイについて(60分米坂先生)
- ・平成20年度レスブリッジ大学学生交換事業夏期海外研修(派遣)参加者の話(20分:木村さん・山口さん・太田さん)13:20到着
- ・その他

[第4回事前研修会]

日時：7月17日(土) 12:40～(2時間程度を予定)

場所：D50教室(7号館)

- ・結団式(理事長・学長出席)
- ・渡航手続きについて(JTB)
- ・スピーチ担当者割当決定
- ・その他

■2010年度学生交換事業 募集ポスター

平成22年度 カナダ・レスブリッジ大学 学生交換事業夏期海外研修募集

カナダ・レスブリッジ大学学生交換事業夏期海外研修の参加者を募集します。参加を希望する学生は、指定された提出書類を記入の上、必ず下記の期限までに提出してください。

記

研修の概略

1. 派遣期間：平成22年8月10日(火)から平成22年9月4日(土)まで
2. 派遣人数：計15名(北海道大学・北海学園大学合わせて)
3. 参加費用：約36万円
4. 備考：① その他、研修に関する詳細は、募集要項を参照してください。
② この研修の参加者は、単位認定の対象となります。

申込み方法

1. 申込書類提出期限：平成22年 5月19日(水)午後 4時00分まで

2. 提出場所：事務部庶務課(豊平校舎)
3. 提出書類：① 応募者身上書 (和文・本学書式)
② Application form (英文・本学書式)
③ 参加誓約書 (本学書式)
④ 健康診断証明書 (本学書式、自動証明書発行後5月11日以降発行可能) 各1通

※ 提出書類の用紙は事務部庶務課学術・国際交流窓口(豊平校舎)にて配布します。尚、参加申し込みをした学生には、5月30日(日)豊平校舎にて選考試験を実施します(予定)。具体的な選考方法および確定した試験日程については、後日掲示にて連絡いたします。



■事前研修日程②

平成22年5月24日
レスブリッジ大学専門委員会
北海学園大学

平成22年度レスブリッジ大学学生交換事業 夏期海外研修(派遣)スケジュール

1. 募集要領

募集期間：平成22年4月21日(水)～5月19日(水)午後4時まで

選考方法：5月30日(日) 筆記試験及び面接試験 候補者

発表：5月31日(月) 午後2時ごろ

2. 日程

4月 6日(火) 募集要項配布

4月21日(水) 募集開始

5月19日(水) 応募締切(4時)

5月24日(月) レスブリッジ大学専門委員会

5月30日(日) 派遣学生選考試験/選考判定会議

5月31日(月) 合格者発表(学内掲示)

6月 9日(水) 北海学園国際交流委員会(法人)へ候補者推薦

■2010年度派遣事業 行程表

2010年度 北海学園/レスブリッジ大学 交換学生研修旅行

2010年7月12日

日次	月日曜	発着時間	発着地/滞在地	交通機関	スケジュール	食事		
						朝	昼	夕
1	8/10 (火)	13:10 14:45 17:55 10:30 14:00 16:18	新千歳発 成田着 成田発 バンクーバー着 バンクーバー発 カルガリー着 " レスブリッジ着	NH2154 AC004 AC1146	国際日付変更線通過 着後:専用バスにてレスブリッジへ ホストファミリー宅へ<ホームステイ>	-	-	機内
2 22	8/11 (水) 8/31 (火)		レスブリッジ		レスブリッジ大学にて研修 〈ホームステイ〉	-	-	-
23	9/1 (水)	6:30発 11:15 11:38	レスブリッジ " カルガリー発 バンクーバー着	AC185	(6:10集合) 着後:ホテルへチェックイン 〈バンクーバー泊〉	-	-	-
24	9/2 (木)		バンクーバー		終日:自主研修 〈バンクーバー泊〉	ホテル	-	-
25	9/3 (金)	10:30 14:05	バンクーバー発	AC003	ホテル集合10:15 出発10:30 直行便にて成田へ 〈機中泊〉	ホテル	機内	/
26	9/4 (土)	15:55 19:30 21:05	成田着 羽田発 新千歳着	NH79	専用バスにて羽田空港へ 着後:解散 お疲れ様でした。	/	機内	-

※NH:全日空 AC:エアカナダ 人数17名

※ホテル:エンパイア・ランドマークホテル

■2010年度派遣事業 カリキュラム

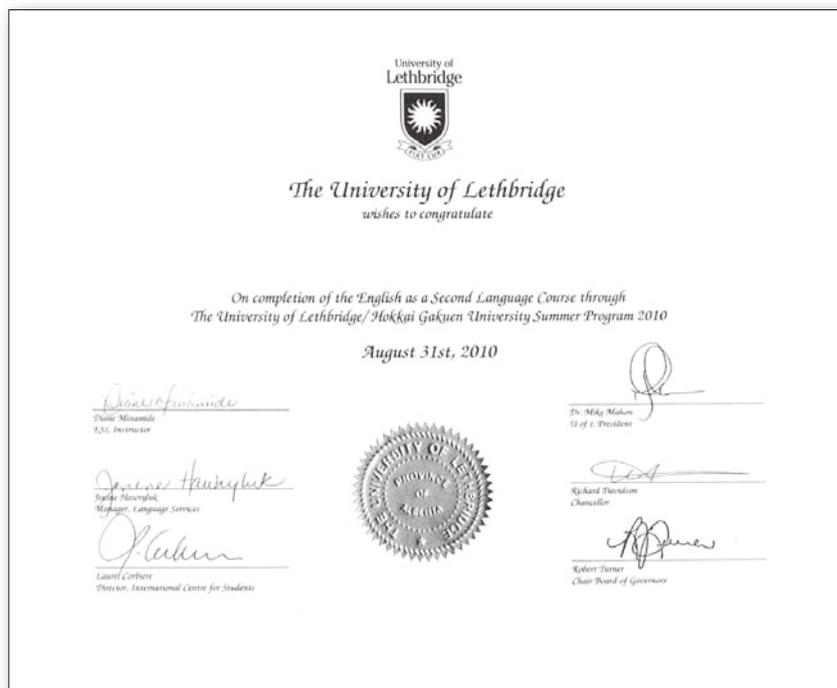
August							Hokkai Gakuen
Sun	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri	Sat	
1	2	3	4	5	6	7	
8	9	10 7:00pm- Arrive in Lethbridge and Meet Home Stay Families in AH100 -Dinner and evening spent with Home Stay Families	11 10:30am - ESL begins 12:00pm- Orientation 3:00pm - Bank stop 5:00pm- Welcome BBQ*	12 9:00am- ESL 12:00pm- Lunch 1:00 pm - Tour 2:00pm- Swimming at UofL	13 9:00am-Fort Macleod/Head Smashed in Buffalo Jump Day trip	14 - Free Day with Homestay Family	
15 - Free Day with Homestay Family	16 9:00am- ESL 12:00pm- Lunch 1:00pm- Guest Speaker 2:00pm- Galt Museum 3:30pm-Fire Station Tour	17 9:00am- ESL 12:00pm- Police Station tour 1:15pm- Lunch 2:30pm- Bridge Valley Golf 3:45 pm -Helen Schuler Nature Centre	18 9:00am- ESL 12:30pm- Picnic at Indian Battle Park 2:00pm- Fort Whoop Up	19 9:00am- ESL 12:00- Student Union Activity* (BBQ and Frisbee game)	20 8:00am- Lake Louise/Banff Trip 5pm - Dinner in Banff 6:45pm- Banff Hot Springs 8:00pm- Free time in Banff	21 8:30am- Breakfast at Banff Centre 9:30am- Banff Springs Hotel/ Gondola 3:00pm - Tour Banff Springs Hotel 5:45pm- Dinner @ Banff Centre 7:30pm-Indigenous Territories Performance	
22 7:00am- Breakfast 8:00am- Adventure at Boundary Ranch! 1:30pm- Return to Lethbridge	23 9:00am- ESL 12:00pm- Lunch 1:00pm- Guest Speaker 2:00pm- Corn Maze	24 9:00am- Whoop Up Days! 11:45- Lunch downtown 1:00pm- ESL	25 9:00am- ESL 11:50pm- Mayor's luncheon 1:45pm- Harvest Haven Organic Farm Tour 3:30pm- Free time	26 9:00am- ESL 12:00pm- Lunch 1:00pm- Guest Speaker 2:30pm- Japanese Gardens	27 9:00am- ESL 12:00pm- Lunch 1:00pm- Neuroscience/ Water Science Tour 3:30pm- Free time 4:30pm- President's BBQ	28 - Free Day with Homestay Family	
29 - Free Day with Homestay Family	30 9am - 4:30pm Waterton Lakes Day Trip*	31 Graduation Ceremonies and Banquet -6:00pm	September 1 Depart Lethbridge - 6:30am	*indicates peer partner activities			

【レスブリッジ大学での研修】

カナダは公用語が英語と仏語のバイリンガル国家であるため、各大学ではESL(外国人のための英語学習)講座を用意している。レスブリッジ大学でも同様である。北海学園の語学研修プログラムは、そのESL講座を土台に本学学生が比較的短期間に効果をあげるような内容となっている。このESLプログラムの修了者に対してレスブリッジ大学は修了認定書を交付している。個々人に対して、英語力向上のレベル判定もする。

会話力向上の近道は、教室で学習した英語を実際に使ってみることである。午前中の授業が終わると午後はレスブリッジ大学の教職員や協力学生と市役所、市議会、博物館見学を行いながら、地元の人々と交流する機会がある。週末はいろいろな特別行事が用意されている。たとえば、レスブリッジ大学学生との交流バーベキューパーティー、伝統文化祭への参加、カナディアン・ロッキーの中心地であるバンフ国立公園への小旅行、乗馬体験、お別れパーティー等盛りだくさんである。このような機会に学生はお礼の言葉を述べたり、大学教職員、市民と交流する。これはまさに生きた英語訓練の場となる。また、3週間にわたるホストファミリーとの交流、協力学生との友好の絆は、この事業の目的とするものである。

■レスブリッジ大学 修了認定書



修了式

【語学研修報告会】

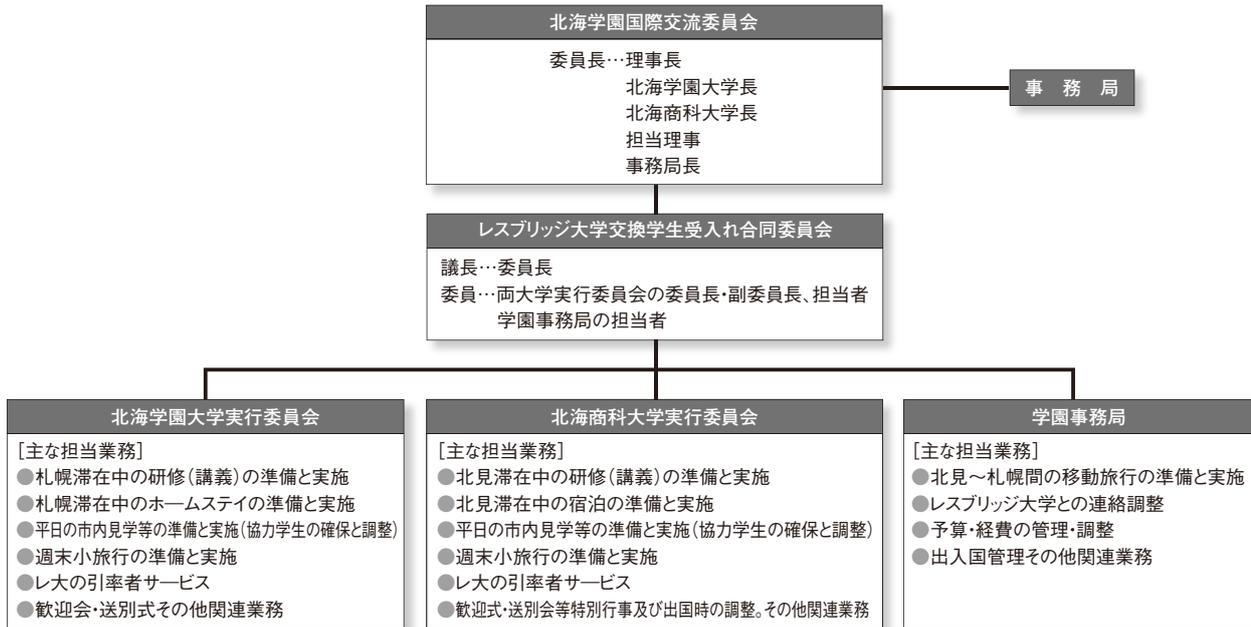
帰国後、学内向けに行う報告会でその成果を発表する。各グループ毎に語学研修、ホストファミリー、協力学生との交流などについて発表する。2010年は学生が研修中に作成したブログも紹介された。(31ページ参照)



報告会

受け入れ事業

[語学研修(受け入れ)事業担当委員会の構成図]



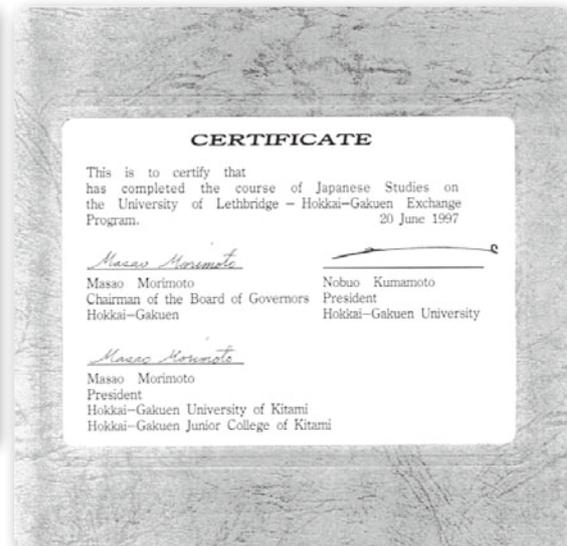
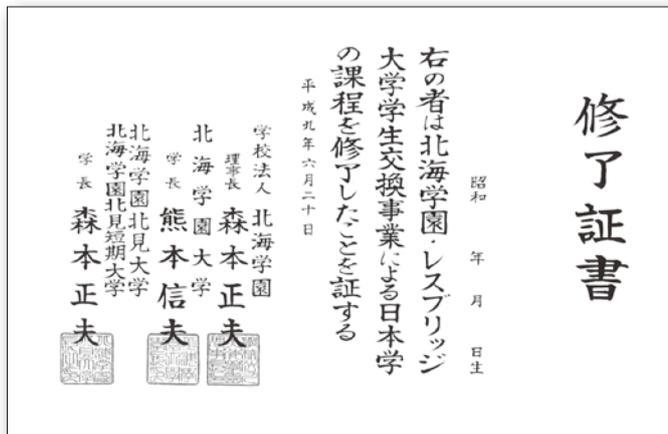
[ホストファミリーの募集とオリエンテーション]

受け入れ事業はホストファミリーの募集から始まる。レスブリッジ大学より研修参加者名簿が届くと同時にホストファミリーの募集を開始する。5月末までに決定し、6月上旬に学生が到着するまでの期間に数回のホストファミリーオリエンテーションを実施する。オリエンテーションではレスブリッジ市、大学の紹介、体験談、注意事項、質疑応答が行われる。数回のオリエンテーションでホストファミリーの結束も強くなる。事務部庶務課学術・国際交流担当とレスブリッジ大学専門委員会が積極的にホストファミリーをサポートしている。

[協力学生の募集とオリエンテーション]

学生部では、レスブリッジ大学からの交換学生が本学に滞在している間、円滑なキャンパス生活を送れるように支援する協力学生を募集する。協力学生数名を一人のレスブリッジ大学生に割り当て、ホストファミリー宅からの通学支援、市内見学支援などをお願いする。さらに、学生部が中心になり、交流会、生け花などの文化体験会、札幌ドーム観戦などを協力学生と企画する。よさこいソーラン祭り、北海道神宮祭見学も人気が高い。

■北海学園大学 修了認定書



■ホストファミリー募集資料

2009年度 カナダ・レスブリッジ大学学生交換事業
ホストファミリー募集!



平成21年6月10日(水)～6月26日(金)までの間、カナダ・レスブリッジ大学から15名の交換学生が本学を訪れます。つきましては、この期間、交換学生を受け入れてくださるホストファミリーを下記の要領で募集します。希望者は、庶務課 学術・国際交流にて申し込み、必要書類を記入の上、期日までに提出ください。

申し込み方法
募集期間: 平成21年4月1日(水)～4月30日(木)
応募書類提出期間: 平成21年4月1日(水)～4月30日(木)16時00分まで
募集定員: 15名(応募者多数の場合は、選考します。)
提出書類: ホストファミリー申込みカード
 ※ 庶務課 学術・国際交流窓口にて配布いたします。
申込み及び書類提出先: 庶務課 学術・国際交流 窓口(豊平校舎)

ホストファミリー受入れ内容
受入期間: 平成21年6月10日(水)～平成21年6月26日(金)まで
受入学生人数: 15名
その他: 詳細は、別紙要領を参照してください。



平成21年3月27日
レスブリッジ大学専門委員会

※ 新型インフルエンザのため、募集は行ったが、実際の宿泊は「北海道国際交流研修施設」を利用した。

■ホストファミリー・協力学生の体験談を聞く会の案内

カナダ・レスブリッジ大学学生交換事業
ホストファミリー・協力学生経験者の体験談を聞こう!

本学では2009年度に協定校のカナダ・レスブリッジ大学より交換留学生を6月ごろ迎える予定です。受入時期はまだ先ですが、この機会にホストファミリーや協力学生とはどのようなことをするのか経験者の体験談を交えて紹介したいと思います。少しでも興味のある方は、庶務課 学術・国際交流窓口またはメールにてお申し込みの上、ご参加ください。

開催日時: 2009年1月14日(水) 16:30～
開催場所: D42番教室(7号館4階)

内容

1. カナダ・レスブリッジ大学の紹介
 - ・レスブリッジ大学の概要
 - ・学生交換プログラムの紹介
2. ホストファミリー・協力学生とは?
3. ホストファミリー経験者の話
4. 協力学生経験者の話
5. フォトセッション
6. 質疑応答・フリートーク



申し込み先: 庶務課 学術・国際交流 窓口

※メールによる申し込みは氏名・学生番号・連絡先を明記してお申し込みください。



2007年度 修了式 ホストファミリーと一緒に
北海道大学北見研究施設にて習字体験

■協力学生募集要項

「協力学生に求めること」

- 1)レスブリッジ大学研修生が札幌滞在中、安全にキャンパスライフを送れるよう支援する。
 - a. 通学の援助:近くの研修生と一緒に登校、地下鉄の乗り方、切符の買方、安全な道の渡り方、バス停の位置など教える。
 - b. 安全に送り届ける。行事で遅く帰宅する時は、責任を持って、ホストファミリー宅まで送り届ける。
 - c. ホストファミリーとの連携をしっかりとる。顔なじみになり、協力して研修生をサポートする。
 - d. おみやげ等の買物、研修生が行きたい場所に行き、ホストファミリー宅まで安全に送り届ける。
 - e. 札幌の生活に早く慣れるように支援する。
- 2)札幌、日本文化の紹介
札幌の紹介、日本文化の紹介を通して、積極的に交流する。
- 3)言葉より気持ち
英語でうまく伝えられないことがあるかもしれないが、交流しようとする気持ち、サポートしようとする気持ち、ホスピタリティーのある人を求めます。積極的に自分から話かける人を求めます。
- 4)一緒に遊ぶだけでは、ダメ。
あくまでも生活支援なので、一緒に遊ぶことが第一の目的ではありません。責任を持って、サポートできる人、ホスピタリティーのある人を求めます。
- 5)交流事業が終わった後に、「協力学生報告書」を提出して頂きます。

■協力学生募集要項

**レスブリッジ大学交換学生
協力学生募集**

本年6月10日(水)から～26日(金)までの間、カナダのレスブリッジ大学から15名の交換学生が本学を訪れます。
この期間、交換学生との交流に協力してくれる学生を下記の要領で募集します。
希望者は学生部事務室まで来てください。

記

募集期間 平成21年4月20日(月)～5月2日(土)
募集定員 25名程度(選考を行なう場合があります)

協力学生に求めること

1. レスブリッジ大学交換学生が札幌滞在中、安全にキャンパスライフを送れるよう支援する
2. 札幌、日本文化の紹介
3. 言葉より気持ち
4. 一緒に遊ぶだけではダメ
5. 交流事業終了後に、レポートを提出していただきます

※日程・詳細等は学生部までお問い合わせください。

レスブリッジ大学交換学生
受入れ合同委員会

平成21年4月20日

■2007年度カナダ・レスブリッジ大学交換学生研修日程表

月日	曜日	9:00～10:20	10:40～12:00	13:00～14:20	14:40～16:00	宿泊		
1	5月30日	水	レスブリッジ～カルガリー(AC203)～バンクーバー5/29(JL017)～成田5/30(JL3047)～千歳着				千歳泊	
2	5月31日	木	8:00 千歳発～8:45 女満別着 (JL2711)	女満別空港～(道立北方民族博物館～オホーツク流水館)～北見研修施設		18:00 市内で夕食	北見研修施設泊	
3	6月1日	金	11:30 北見市長表敬訪問	12:30 市内で昼食	北見市内見学	18:00 市内で夕食	北見研修施設泊	
4	6月2日	土	学内施設見学	書道講座	日本語研修 1 Survival Japanese 3301教室	日本語研修 2 Treasure Hunt 3301教室	18:00 市内で夕食 ウエスタン 国際会議場横	同上
5	6月3日	日	日本語研修 3 調査結果発表 3301教室	日本語研修 4 Role Play作成 3301教室	日本語研修 1 大前 博亮 3301教室	18:00 市内で夕食 山の家	同上	
6	6月4日	月	研修旅行① 北見キャンパス～小清水原生花園～斜里(昼食)～オンシコシンの滝～知床観光船(硫黄山航路)～知床峠～ウトロ				知床第一ホテル別館泊	
7	6月5日	火	研修旅行② ホテル～硫黄山～摩周湖～弟子屈～阿寒(アイス部落, 舞踊鑑賞)～石北峠～層雲峡				朝陽リゾートホテル泊	
8	6月6日	水	研修旅行③ ホテル～黒岳ロープウェイ(リフト)～旭山動物園～北海商科大学(17:30頃)		17:30 商科大3階305集合 17:45 ホストファミリー紹介 商科大3階305	ホームステイ 1泊目		
9	6月7日	木	オリエンテーション 米坂 スザンヌ 商科大8階開発政策研究所	12:15～13:45 歓迎昼食会 コスモス			同上 2	
10	6月8日	金	日本語研修 5 神谷 順子 商科大8階開発政策研究所	日文学研修 2 岩崎 まさみ 商科大8階開発政策研究所	日本語研修 6 神谷 順子 商科大8階開発政策研究所	日文学研修 3 石井 晴子 商科大8階開発政策研究所	同上 3	
10	6月9日	土	13:30商科大1階ロビー集合 14:00～18:00 よさこいソラン祭り見学(学生交流)				同上 4	
12	6月10日	日					同上 5	
13	6月11日	月	日本語研修 7 中川 かず子 商科大8階開発政策研究所	日文学研修 4 当麻 庄司 商科大8階開発政策研究所	12:50 商科大出発 13:30 札幌市長表敬訪問	14:30 北海道知事表敬訪問 15:10 出発(理事長宅歓迎会へ)	16:00 理事長宅歓迎会	同上 6 (夕食・理事長宅)
14	6月12日	火	日本語研修 8 中川 かず子 商科大8階開発政策研究所	日文学研修 5 高橋 伸幸 商科大8階開発政策研究所	13:30 商科大1階ロビー集合 14:00～16:30 着物着付け・折り紙(学生交流) 札幌天神山国際ハウス		同上 7	
15	6月13日	水	日本語研修 9 神谷 順子 商科大8階開発政策研究所	日文学研修 6 神谷 順子 商科大8階開発政策研究所	14:50 学園大3号館1階第1会議室集合 15:00～16:30 華道体験(学生交流) 第1会議室(学部事務室隣)		同上 8	
16	6月14日	木	日本語研修 10 神谷 順子 商科大8階開発政策研究所	日文学研修 7 野崎 久和 商科大8階開発政策研究所	16:30 商科大1階ロビー集合 地下鉄で札幌ドームへ		18:00 プロ野球観戦(学生交流) 札幌ドーム	同上 9 (夕食)
17	6月15日	金	週末旅行 8:50商科大1階ロビー集合 9:00北海商科大学～中山峠～洞爺湖～昭和新山～有珠山ロープウェイ～白老ポロトタン～夕食(シェラトンホテル)～19:00北海商科大学				同上 10 (夕食)	
18	6月16日	土	10:00 商科大1階ロビー集合 北海道神宮神輿行列見学(学生交流)		14:45学園大体育館集合 15:00 対東北学院大学定期戦(バスケットボール)応援(学生交流) 学園大体育館		同上 11	
19	6月17日	日					同上 12	
20	6月18日	月	日本語研修 11 中川 かず子 商科大8階開発政策研究所	日文学研修 8 川端 俊一郎 商科大8階開発政策研究所			18:00 商科大1階ロビー集合 18:30～20:30 北大体験(学生交流) 商科大裏	同上 13
21	6月19日	火	日本語研修 12 神谷 順子 商科大8階開発政策研究所	日文学研修 9 大東 俊郎 商科大8階開発政策研究所	13:00 学園大体育館集合 13:30～16:00 レクリエーション(学生交流) 学園大体育館		同上 14	
22	6月20日	水	日本語研修 13 神谷 順子 商科大8階開発政策研究所	日文学研修 10 加藤 由紀子 商科大8階開発政策研究所	15:45 北海学園国際会議場集合 16:00 修了式 17:30～19:00(予定) 送別会 札幌ガーデンパレス2階丹頂		同上 15	
23	6月21日	木	出発準備・自由				同上 16	
24	6月22日	金	8:20北海商科大学集合 8:35商科大出発 (JL2504) 10:35am 千歳発～12:40pm 関西着					
25	6月23日	土	関西					
	～		関西					
30	6月28日	木	関西					
31	6月29日	金	伊丹 (JL3002)～成田 (JL018)～バンクーバー (AC224)～カルガリー～レスブリッジ					

引率者一覧

■北海学園・レスブリッジ大学交流協定に基づく交換学生(派遣)引率者一覧

	派遣期間	引率者氏名	所属	学生数
1	1986(S61)年 8月3日～9月3日	田中 修 (短期表敬)	北海学園大学学長	15名参加 (学園10名北見5名)
		大江 敏美 (短期表敬)	北海学園大学教授	
		吉田 省一	北海学園北見大学教授	
		河西 勝 (交換教授)	北海学園大学教授	
		和泉田 正宏	北海学園大学事務部長	
		田村 邦雄	北海学園総務課主任	
2	1988(S63)年 8月3日～8月30日	桃野 作次郎 (短期表敬)	北海学園北見大学学長	15名参加 (学園10名北見5名)
		西澤 悟 (交換教授)	北海学園大学教授	
		鈴木 正俊	北海学園総務課書記	
		大前 末行 (高校交流調査)	北海高等学校教諭	
3	1990(H2)年 8月2日～8月29日	大江 敏美	北海学園大学教授	20名参加 (学園13名北見7名)
		工藤 誉伸	北海学園総務課書記	
4	1992(H4)年 8月3日～8月30日	グラハム・ハード	北海学園北見短期大学教授	20名参加 (学園13名北見7名)
		高田 哲也	北海学園大学人文学部教学次長	
5	1994(H6)年 8月4日～8月31日	長手 喜典	北海学園北見大学教授	20名参加 (学園13名北見7名)
		大橋 孝行	北海学園大学庶務課書記	
6	1996(H8)年 8月4日～8月31日	桂 晴子	北海学園大学助教授	20名参加 (学園13名北見7名)
		栗原 隆文	北海学園大学教養部書記	
7	1998(H10)年 8月4日～8月31日	松本 益弘	北海学園北見短期大学教授	20名参加 (学園13名北見7名)
		木村 勝照	北海学園大学学生部主任	
8	2000(H12)年 8月4日～8月31日	本田 宏	北海学園大学法学部講師	20名参加 (学園15名北見5名)
		笹川 雅司	北海学園大学経済学部主任	
9	2002(H14)年 8月2日～8月29日	リチャード・キザー	北海学園大学法学教授	20名参加 (学園16名北見4名)
		笹川 雅司	北海学園大学経済学部主任	
10	2004(H16)年 8月5日～9月1日	マーク・松根	北海学園大学経営学部助教授	17名参加 (学園17名北見0名)
		黒澤 規央	北海学園大学工学部主任	
11	2006(H18)年 8月4日～8月29日	小野 丘	北海学園大学工学部教授	19名参加 (学園14名商科5名)
		山内 雅仁	北海学園大学図書館書記	
12	2008(H20)年 8月8日～9月2日	リチャード・キザー	北海学園大学法学部教授	17名参加 (学園11名商科6名)
		日置 奈津子	北海学園大学工学部書記	
13	2010(H22)年 8月10日～9月4日	晴山 雅寛	北海学園大学工学部教授	15名参加 (学園11名商科4名)
		清永 麻衣子	北海学園大学庶務課書記	

氏名・所属については、実施当時のものを掲載しています。

■北海学園・レスブリッジ大学交流協定に基づく交換学生(受入)引率者一覧

	滞 在 期 間	引率者氏名	所 属	学 生 数
1	1987(S62)年 5月24日～6月20日	David W. Atkinson	学生部長	15名参加
		Charles H. McCleary	生涯教育部長	
		Cecile McCleary	同夫人	
2	1989(H1)年 6月6日～7月4日	David W. Atkinson	学生部長	15名参加
		Dalyce Forster	ESLコーディネーター	
		Michell Forster	LCI高校校長	
3	1991(H3)年 6月4日～6月27日	Kurt K. Klein	経済学部教授	15名参加
		John Taplin	ESLコーディネーター	
4	1993(H5)年 5月27日～6月22日	John Taplin	ELCコーディネーター	15名参加
		Andrea Garencser	生涯教育コーディネーター	
		Nan Cornelsen	ELCインストラクター	
5	1995(H7)年 5月27日～6月22日	Lynn Wyton	ELCインストラクター	15名参加
		Connie Blomgren	ELCインストラクター	
6	1997(H9)年 5月28日～6月22日	Wilma Winter	副学長補佐	15名参加
		Dayna Daniels	保健体育学科長	
7	1999(H11)年 6月3日～6月28日	Mark Sandilands	心理学科准教授	13名参加
		Leona Jacobs	図書館マネージャー	
8	2001(H13)年 5月30日～6月24日	Dayna Daniels	運動科学科教授	12名参加
		Peter Visentin	音楽科助教授	
9	2003(H15)年 6月1日～6月22日	Lisa Doolittle	芸術学部准教授	12名参加
		Fred Greene	アートギャラリーマネージャー	
10	2005(H17)年 5月31日～6月21日	Ian MacLachlan	地理学科准教授	15名参加
		Diane Clark	講師	
11	2007(H19)年 5月31日～6月22日	Edward Jurkowski	芸術学部准教授	11名参加
		Deborah Kullman	講師	
12	2009(H21)年 6月5日～6月26日	Lance Grigg	教育学部教授	14名参加
		Laura Ferguson	インターナショナルステュデントセンター・スタッフ	

氏名・所属については、実施当時のものを掲載しています。

1988年度

派遣学生①

夏期海外研修に参加して

鳥谷部 寿人

(独)土木研究所寒地土木研究所研究員

工学部土木工学科卒



この研修事業が25周年を迎えることになったことに對し、心からお慶び申し上げます。そして、これまで事業の継続ならびに発展にご尽力されてこられた皆さまに心から感謝申し上げます。

【プロローグ】

当時の資料を調べますと、在学中に書き記した感想文がありましたので、これを頼りに当時を振り返ります。当時の感想文は、冒頭、次のように記していました。

「カナダ・レスブリッジ大学との交換留学は、僕にとって初めての海外生活でした。近年日本が、世界の国々から注目されるようになり、日本人もこれから外に向けて広い視野をもつ時代になると言われる中で、この機会は僕にとって大変貴重な経験になりました。」

当時は、バブル景気の真ただ中で、GNPは世界第2位まで上り詰める勢いでした。今日、環境は大きく変化しましたが、日本の技術力とリーダーシップは一層必要とされています。そういう意味で国際社会とのかかわりは、一層重要になるでしょう。

【ホストファミリーとの思い出】

レスブリッジでの生活は、驚きと感動の毎日でした。地平線まで続くまっすぐな道を、大陸の乾いた風を受けながら通学したこと、町外れのグリーンエレベーター(収穫した穀物を貯蔵し、貨物車等で運び出すための施設)と麦の匂いが続く農村風景はいまでも胸の奥に焼き付いています。ホストファミリーは当時30代前半の若夫婦でご主人は鉄道会社に勤めており、奥様はレスブリッジ大学の学生兼会社の事務員で、家事は互いに分担していました。また、当時10才と8才の二人の可愛い男の子がいて、毎日にぎやかに過ごしました。自然に恵まれた中で生活はとても楽しく、朝食のスクランブルエッグは家畜の鶏が産み落とした新鮮な卵でした。子供たちと裏の畑でとって食べたビーンズ豆は土の香りがしてとても新鮮でした。

今思うと共働きでしかも学生だったホストが、日本人留学生を受け入れることは決してたやすいことではなかったと思います。それでも、嫌な顔一つせず、長男の部屋をひと月もの間、私のために提供してくれた彼らには本当に感謝しています。

【パーティ・アニマル】

レスブリッジではフリー・イブニングとされる自由時間に何度もサパー・パーティに招待され、彼らのパーティ好きには驚きました。当時参加した北海学園の仲間たちもこれに負けないパーティ好き。私たちは「パーティ・アニマル」と呼ばれました。日本ではテーブルを囲んで挨拶したりしますが、カナダのこのようなパーティではそれぞれ好きなことについて好きなもの同士自由に話します。つまり、その場にきた時からすでにパーティが始まっているのです。初めは勝手が分からず戸惑いましたが、いつのまにかそういう雰囲気が好きになりました。

【授業・アクティビティー】

大学では、語学とカナダ社会についての講義を受けました。語学研修では、短期コースの私たちの他、中国やアジア諸国からの留学生と一緒に講義を受けました。カナダは、先住民族のインディアンとヨーロッパ系移民や日系人など様々な民族が共存する多民族国家です。午前中講義を受けた後、午後から実際にこれらの文化を体験する機会が与えられました。バッファロー・ジャンプという地区でインディアンの文化と文明の歴史を学び、また、ハッターライト・コロニーと呼ばれているところでは、宗教の厳しい戒律を守っている人々にも会いました。

【エピソード】

感想文の後半では以下のように記しました。

「今まで中学から英語教育を受けてきた訳ですが、実生活で使って初めて生きたものになるという気がしました。また、それは、学力以上に度胸であると思いました。」とにかく理解したい、分かってもらいたいという気持ちさえあれば、必ず伝わるものだと思信しました。現在、私は仕事で海外に出かける機会があります。あの時の楽しかった思い出があるからこそ、臆せず外に踏み出せるのだと思います。今この原稿もオーストラリアの旅先で書き上げたところです。オーストラリア社会では、小学生から第二外国語を履修しています。ちなみに、第二外国語のトップは最近まで日本語だったそうです。

最後に、この原稿を感想文の終わりの言葉で締めくくりたいと思います。

「とにかく素敵な町と風景と人々がいて童話の絵本のようにでした。そしてカナディアンと日本から来た18人のメンバーの深い絆を作ることが出来ました。ぜひもう一度行きたい、と思わずにはいられない。そんな国だと思います。」後輩を育てていくために是非、この素晴らしい事業を継続していただきたいと願います。

私が「私らしく生きること」を学んだ夏

児玉 友希子

ドコモサービス北海道勤務

法学部法律学科卒



私が参加したのは、平成8年度(1996年度)の交換プログラムです。交換留学に憧れていた私にとって、ホームステイ、英語での講義、国境への小旅行、ピアパートナーとの交流など、どれをとっても楽しく胸踊る経験が毎日続き、どの写真を見ても幸せそうに笑っています。

緊張の初ホームステイ先は当時のレスブリッジ大学・学長夫妻宅となり、体も心もスケールの大きい学長と、車椅子ながらテキパキと働く奥様に大変お世話になりました。毎晩ご夫妻は「今日は何を勉強したの?」と質問してくれて、私も覚束ない英語で必死にお話をしました。ご夫妻の温かな眼差しが、今も忘れられません。英語を話すことへの恐怖感は、このおかげで一気に無くなりました。

授業については、日常生活や流行なども題材になり、英語のみで行われました。時には理解できない箇所もありましたが、根気強い先生方の説明と、出来た時に褒められる言葉が嬉しくて、勉強が毎日楽しみでした。その他、紙で仮面を制作したり、ダンスを踊ったり、郊外へ見学に出掛けたりもしましたが、常に「もう少し英語が理解できれば…」というジレンマがあったことを覚えています。

当時の私は既に大学4年生。漠然と「卒業後は留学だ!」と決心し、無謀にも就職活動を一切していませんでした。しかし、帰国して初めて、私は自分が留学に憧れていただけで、その先の将来を何もイメージしていないことに気が付き、愕然としました。私がやりたかったこと、それは「英語を学ぶこと」ではなく、「英語をツールに人と関わりを持ったり、人を知ること」だったのです。その後改めて就職活動を行い、現在に至ります。

あの夏は、現在の私が「私らしく生きている」ことの出発地点だと言えます。素直なようで案外頑固な私には、社会人として自立するために、自らが体験し、衝撃を受け、悩み、そして決めるという段階が必要でした。私は、就職活動で得ること以上の経験を、この交換プログラムで得たと感じています。全て、カナダという国の懐の広さと、大学関係者の皆さんによる事前の準備や計画、現地のサポートあってこそその内容・成果だったと心から感謝しております。改めまして、本当にありがとうございました。

*この他にも、カナディアンサイズ?の食べ物に驚いたり、のどかなレスブリッジだからこそ、ピアパートナーたちが一面の星空を見せてくれたり、大学から家まで帰る道すがらプレーリードックと思しき動物を見かけたり、ホストファミリーがモーターホーム(キャンピングカー)でアメリカとの国境近くまで泊りかけの旅行に連れていってくれたり…。忘れられない思い出ばかりです。今も当時の仲間たちとたまに連絡を取り合います。とても懐かしいです。

交換留学を振り返り

高田 倫志

日本経済新聞 編集局 記者

人文学部日本文化学科卒



百聞は一見に如かず——。海外研修という経験を伝えるのにこの言葉ほど適した言葉はないだろう。言葉の壁や文化の壁。文章の中で、あるいは映像の中で知る海外と、実際に現地へ行き肌で体験するのでは天と地ほど違う。カナダ・レスブリッジ大学への研修は私の人生を大きく変えたきっかけの1つだったことは間違いない。

海外研修に応募した当時の私は英語を話す自信も能力もそれほど持たず、目的意識すらあいまいだった。もともと「1カ月に満たない研修期間で何ができるのか」という意識が第一印象で、語学能力の向上というより初めての海外旅行。ある程度の目的意識を持った学生と比べても、不逞な意識を持った参加者だったことは否めない。そんな甘い考えで参加した私が、カナダ滞在中に受けた衝撃は数多い。語学力の不足はもちろん、ホストファミリーと行った日曜礼拝や先端医療に対する各人の宗教観の違い、日本文化に対する自らの無知など数え上げればキリがない。

特に1つを挙げるならカナダの大学生と日本の大学生の目的意識の違いだ。私が接したカナダの大学生らは明確な目的をもって大学で必要な知識を身につける。例えば旅行会社に就職したいと考える学生は、各国の成り立ちの歴史や文化、語学を学びそれを就職に直接結びつけるための努力を惜しまない。

大学時代の私は「何となく公務員に」もしくは「マスコミ関係の仕事に就ければ」といった漠然とした卒業後の進路しか思い描いていなかった。そんな時「公務員になる目的は何なのか。マスコミならどんな報道に携わりたいのか。何を身につけようという人間になりたいのか」。カナダの大学生から言われた率直な質問に対し、当時の私はすぐに答えを返すことができなかった。

自分が本当にしたいことと今できることは何か、そのために何が不足しているか。語学力の不足だけでなく、返す言葉を持たないという情けなさや悔しさが、大学生活を見つめ直す転機にもなった。目的意識は誰もが程度描いているが、それを漠然と抱くのと高く掲げるのでは、取り組みにかける真剣さの度合いも変わる。留学前と比べ、講義に臨む姿勢も変わった。

大学内で得ることのできる知識だけでなく、学外で身につけることができる「経験値」の向上を意識し始めたのもこの頃だ。アルバイトでためたわずかな旅費でヨーロッパの安宿を単身回ったこともその1つ。スリや置き引き、強盗などが日常茶飯事に起こる場面を目にするなど、今思えば危険な経験もあった。ただ、旅行先や宿を決めない1人旅は社会人になると難しく、今も懐かしく思い出す時がある。「大学生にしかできないこともある。学生生活を最大限に楽しみ、学び、人生の糧としろ」。北海学園大学の恩師から頂いた言葉が、今私の血となり肉となって人生に溶け込んでいる。

夏期海外研修に参加して

宇野 美穂

法学部政治学科 2年



平成22年8月10日から9月4日まで、私はカナダのレスブリッジに留学してきました。そこに滞在した約3週間、平日は毎日レスブリッジ大学へ通い、午前はESLという授業を受け、午後は様々なActivityをしました。

ESLでは会話や発音、文法などを学習したり、パソコンで日記を書いたりしました。カナダの授業スタイルは、日本の受身の授業とは対照的で、自ら進んで発言することを求められました。はじめは緊張でなかなか慣れませんでした。毎日このような授業を受けていくうちに、カナダの授業スタイルの良さを感じました。

Activityでは、レスブリッジの色々な場所へ行き、カナダの歴史や文化を学びました。カナダと日本を比べると共通することもありましたが、圧倒的に違うことが多かったため、毎日がとても新鮮でした。

土日はホストファミリーやレスブリッジ大学の協力学生と過ごしました。私のホストファミリーは夫婦と子ども2人の4人家族で、皆とても親切に接してくれました。家には、ほぼ毎日ホストファミリーの友人や家族が訪れ、夕食を食べたり買い物に行ったりして夜まで一緒に過ごすことが多かったのです。皆私に対してとても優しく、そして日本のことについてすごく興味を示してくれて、とても嬉しかったです。協力学生は私たちを映画やBirds of Prey Centreなどに連れていってくれ、楽しい時を過ごさせてくれました。彼らは日本の学生よりも意志が強く、皆自分の目標に向かって頑張っていたので、私も彼らを見習わなければいけないと思いました。

私はこの夏休みに他にもやりたいことがあったのですが、このようなたくさんの貴重な経験をする事ができたカナダ留学を選んで本当によかったと思っています。海外で生活したことにより、日本とは全く違う価値観を知り、それにより自分の視野が広がりました。他の国の歴史や文化に触れることで、同時に日本の歴史や文化を客観的に見ることができました。英語の能力は、やはり1ヶ月という短期間では思っていたより上達しませんでした。これからももっと勉強していこうと思いました。この経験は決して忘れられないものであり、今後の学校生活に良い影響を与えていくものとなりました。



ホストファミリーと過ごした休日

個人的感想

北守 有沙

法学部 1年



私は今回の交換プログラムを通じて、日本とカナダの文化から生じる価値観の違いは、さほど強くは感じませんでした。自分の持っている少ない語彙の中で伝えたい事を正確に伝えきれず、意思疎通がうまく図れないという事はありました。しかし、全く互いに受け入れることのできないような場面は経験しませんでした。それは恐らく、互いに互いを理解しようとし、歩み寄る努力をしていたからだと思います。ピアパートナーは同じ学生であり、ホストファミリーは自分の家族であるという安心感が私の中にあっただけでも関係しているのかもしれない。そのおかげで、彼らとすぐに打ち解けることが出来ました。私の中で、彼らの存在はとても大きく、彼らから多くのことを学びました。本当に感謝しています。カナダでの生活の中で一番身近な存在であったホストファミリーやピアパートナーとの過ごした時間が、私にとって一番貴重で価値あるものだと感じています。

この研修に際して、私の当初の目的は英語の能力を伸ばすことにありました。そのため、ESLの授業を最も強く意識していました。また、ピアパートナーやホストファミリーとのコミュニケーションも、自分の英語を向上させるための学習の一環としか捉えていませんでした。しかし、単に英語能力を伸ばすことだけが必ずしも円滑なコミュニケーションに繋がるのではないということ、カナダに住むたくさんの人たちと触れ合っていく中で気づかされました。確かに、スピーキングやリスニングの能力が高い事は、会話をスムーズに進めることに繋がりますが、それは一種の手助けでしかありません。本当に相手と意思疎通を図りたいと思うなら、相手の言おうとしていることに本気で耳を傾け、本気で自分の考えている事を伝えようとする必要があるのです。

私は将来、海外で働きたいと考えていますが、それを実現させるためには、今より遥かに英語能力を向上させる必要があります。そして、努力し続けなければなりません。それに加えて、人とのコミュニケーションの仕方に配慮していくということも新たな課題となりました。これに気付けたという事は、カナダでの滞在によって得られた一番の収穫であったと思います。日本と全く違った環境の中、カナダで暮らす素晴らしい人たちに会い、親密な関係を築けたことで、今まで気づかなかったことを発見することができました。

今回の交流事業に参加して、刺激を受け、人間的に成長することができました。参加できて本当によかったと感じています。これからは、将来の目標を現実のものにできるように最大限努力し、有意義な学校生活を送っていきたいと思います。研修にあたってご指導くださった先生、ご協力くださった皆様に感謝申し上げます。

第一回レスブリッジ大学 UOL訪問回想記

大江 敏美

元教養部教授



日本ではバブルの後期に差し掛かる時期でもあった1990年の夏休みに20名の学生(豊平キャンパス13名;北見キャンパス7名)及び引率者(大江、補助員として学園本部職員工藤)は、バンクーバー空港においてUniversity of Lethbridge(以下UOL)の受入担当チャールズ・マククレアリ教授(通称チャック)の出迎を受けました。そこから東のカルガリ空港着、そこには受け入れ補助員キム(チベット難民、UOL1年生)が待っていました。一行は大学バスで大平原を南下しレスブリッジに着きました。

大学は、1967年創立で校舎はオールドマン・リバーの川底から岸の傾斜地に立ち、岸辺から橋を渡ったところが一階で学生玄関となっていました。宿舎ですが、引率者は大学宿舎に、学生諸君はホームステイでした。大学での勉強はEnglish as a Second Languageで、昼食のカフェテリアで皆が集まり情報交換しました。週末には大学バスでアルバータ州各地を訪れ特に国立公園では自然の景観を満喫しました。また大学関係者の自宅に招かれバーベキューをご馳走になりました。幸い滞在中は病人も出ず、犯罪にもまきこまれず、交通事故も皆無であったことは幸いでした。

学生諸君は親元を離れ勉強とカナダ文化に浸る生活に集中できたと確信しています。大学内外で積極的に心を開き、好奇心を旺盛に英語で質問し自分のこと日本のことを説明することが英語力の強化につながるように心掛けました。レスブリッジはアルバータ州南部の都会(当時の人口5万人)、スポーツセンターを持ち、このセンターで到着早々各出身国参加の市民歌謡祭があり、我々は壇上に並んで事前に練習した当時欧米で流行の「4つの強い風」及び日本の歌を合唱して喝采を受けました。

UOL最後の日は全員が成績認定書を受領、8月24日にはカルガリ空港経由バンクーバーに向かいました。バンクーバーではプリティッシュ・コロンビア大学キャンパスを見学後、市内自由遊覧、その後ロサンゼルスにて飛行機を降り、アナハイムにあるディズニーランドを楽しみ、翌日空港に戻り帰国の途につきました。千歳空港で解散した時、諸君の若い頭脳のなかに蓄積された基礎語学力、国際順応性が無駄にならないよう努力の継続を誓い合いました。



1990年派遣引率教員大江先生に花束贈呈

A Chaperone's Reminiscences

Mark Matsune

経営学部教授



In 2004, I had the opportunity to accompany a group of 17 students from Hokkai Gakuen University to the University of Lethbridge in Alberta, Canada. Our exchange group marked the 10th anniversary visit to the U. of L. The Canadian hospitality and the students' experiences were a testament to the lasting legacy of the exchange which has now entered its 25th year.

Having had limited experience as a student chaperone, I obviously had the natural pre-departure anxieties about the students, my own Japanese language capabilities and my "working" relationship with my fellow chaperone. Basically all of these apprehensions were completely unwarranted and all parties (I think) enjoyed a memorable summer and valuable growing experience in Alberta, Canada.

Of course, there were "bumps in the road" which were a predictable part of any international study experience. The first bump happened on our first day in Canada. One of our students lost his wallet (and credit card) within the first 24 hours. . . "Fine . . . That is the "one obligatory glitch" in our exchange trip." It wasn't that simple. This incident turned out to be just the first of a series of challenges some of the students encountered in their first experience abroad without their families. Very fortunately our group accepted these challenges and strove to find positive outcomes to almost all of the situations.

Some of the most immediate "dividends" from this exchange were the academic endeavors of three of the exchange students. They returned to Canada to successfully complete long-term ESL programs at other highly respected Canadian universities before graduating from Hokkai Gakuen University.



Our group with U. of L. President Cade (front center) and Associate Vice-President Alam (back left)

In addition to the academic pursuits of these three students, I know that others also revisited Canada or other “English-speaking” countries in subsequent years, at least partially resulting from the positive stimulus they gained from the 2004 University of Lethbridge Exchange.

Finally, I will indulge in some personal reminiscing of my participation in this exchange. First and foremost, I will always be grateful to have been teamed with Norio Kurosawa as chaperones. In any student exchange the ongoing 24/7 responsibilities of the chaperones can be the difference between a positive or negative experience for the students. Mostly due to the excellent rapport between Norio, the students and myself, I would like to think that all individuals will look back that the 2004 trip with positive memories. Everyone unreservedly supported each other and as a result, I hope we were worthy representatives of Hokkai Gakuen University.

“My 5 Best Memories”

1. 17 “Happy Campers”
2. Norio Kurosawa, the “Camp Leader”
3. Western Barn Dancing
4. Canadian Food (Beef and Beer)
5. The kind and generous hospitality of the University of Lethbridge and the Lethbridge community. Thank you very very much!!!



Waterton National Park with Peer Partners



引率者として学んだこと

日置 奈津子

工学部主任



私は、2008年度の夏期海外研修に引率者として参加し、多くのことを経験させていただきました。

レスブリッジののどかな自然に癒され、カナダの人の温かさに触れ、すばらしい環境の中、私達は有意義な時間を過ごすことができました。

午前中は主に授業、午後からはレスブリッジ市内の観光など盛りだくさんの内容でした。警察署や消防署など普段個人旅行ではなかなか訪れることのできない場所にも案内いただき、学生達も興味津々、英語に苦戦しながらも積極的に質問をしていた姿が印象的でした。また、週末の小旅行ではバンフを訪れカナダの壮大な自然に圧倒され、Lake Louiseなどのすばらしい景色に感激しました。引率者という立場でありながら、学生と一緒に楽しんでまいりました。

レスブリッジで出会った方々には、とても親切にいただきました。特にレスブリッジ大学のスタッフと協力学生には、アクティビティの準備から滞在中の私達の身の回りのことまで大変お世話になり、こちらの要望にいつも“Of course!” “No problem!”と快く応えてくれ、その言葉に何度も助けられました。

また、レスブリッジ大学の教職員の方々と食事会などでお会いする機会もあり、不慣れな英会話で緊張しましたが、大変貴重な体験となりました。皆さんの多くは、北海学園に来訪された方で、その際北海学園の教職員にお世話になったというお話をよく伺いました。

私達がこのようにレスブリッジの皆さんに親切にしていたのも、今年で25年となる留学交換事業で築かれた繋がりなのだ実感するところです。また、参加した学生との交流も私にとって、学ぶものが多かったです。普段、大学で多くの学生と接していますが、こんなに一人ひとりの学生と向き合ったことはなかったと思います。

17名の学生がそれぞれ持つ考えや悩みを知り、共感し協力、時にぶつかり合い、どれほどサポートできたかはわかりませんが、精一杯取り組んでいる学生に応えようととにかく必死でした。

目の前の学生が何を求め、私に何ができるか、固定観念を外し、学生と向き合うということをあらためて教わったように思います。

最後に、本事業に引率者として派遣させていただくにあたり、ご尽力戴きました関係者の皆様はこの誌面をお借りしてお礼申し上げます。

受け入れ事業に参加して Memories of the Sapporo Program

1993~2009年度 日本語講座担当者

日本語講座担当者から見た レスブリッジ大学 夏季日本語講座について

中川 かず子

人文学部教授



北海学園大学豊平キャンパスにおいて「本格的に」日本語コースを開始したのは1993年からだ。「本格的に」というのは日本語を挨拶程度でなくある程度のレベルまで徹底した「日本語学習」プログラムを目標としたということである。その前は、英語の石井晴子先生が英語とローマ字を併記した教材を用い、英語を媒介語とした即戦力をつける日本語教授を行っていた。1993年の講座初日、日本語直接法で「はじめまして、どうぞよろしく」の場面練習。その後は日本語の挨拶が教室に響き渡り、学生同士でも日本語が飛び交った。

おかげで、コースの間から修了式まで日本語を積極的に話そうとする学生が多かった。レスブリッジ大学(以下、UOL)側も参加学生への評価を求めたためか、学生の授業態度はとてもよかった。しかし、成績評価を出したのは一回きりで、1994年以降からは現在に至るまで全く公的な評価を行っていない。1995年から二通信子先生が加わり、日本語の会話練習を重視したプログラムを継続していった。日本語のコース設計と運営は安定したものの、この研修プログラム全体は午前が日本語と文化講義、午後が役所や会社への表敬訪問、市内観光、学生、ホームステイ家族との交流などぎっしり詰まっている上に、夜も協力学生と食事や娯楽に出かけるため、午前中の授業が彼らにとって次第にきつくなっていくのが見て取れた。そこで、



教室で



あまり強化コースにせず、楽しく日本語と日本文化を学習できる「らくらく」コース設計に切り替えた。この結果、日本語の会話力の上達は無理でも日本人とのコミュニケーションに慣れ、日本の社会・文化を肌で感じることはできたと思う。2005年からは神谷順子先生が日本語コース運営の中心となり、日本語教員養成課程の受講生を中心とする協力学生(いわゆる、TA)が常にUOL学生を取り囲み和やかに会話練習する授業風景が見られた。

今後も日本語コースについては、プログラム全体の活動に連動させながら、学生達が楽しんで学べるような授業内容を考えていきたい。また、日本人学生にはUOL学生の日本語学習と日本文化体験の支援ができるよう、日頃から自分達の言語と文化に関心をもってもらいたいと思う。

1986年度 レスブリッジ大学協力学生

1986: The First Students from Japan Arrive in Lethbridge



Shelley Scott

Associate Professor, Faculty of Arts and Science
University of Lethbridge

In the spring of 1986 I was just graduating from the University of Lethbridge with my B.A. in Drama. I was offered a job by David Atkinson, who at that time was the Associate Dean for Arts & Science and one of the first organizers of the Hokkai Gakuen exchange.

Sarah Amies and I were hired to find host families for the first group of students that would be arriving from Japan. We were also asked to plan activities for the students and to provide them with transportation. Unfortunately, I didn't have my driver's license at that point, so that was my first task - I had to learn to drive before the Japanese students got here! Luckily I did, and Sarah and I had a wonderful summer making friends with and truly enjoying the very first group of exchange students. The students were friendly and patient with us, although I suspect they started getting tired of all the barbecues and secretly longed for some Japanese food! I remember that my boyfriend and I played baseball every Sunday with a group of friends and we enjoyed bringing the exchange students with us to one game - although their pitching was much better than ours!

The biggest moment of the summer came when Sarah Amies gave birth to her first child, just days before the students were due to go back to Japan – so I'm sure that summer



交換教授として来札した時

was particularly memorable for her and for them!

My boyfriend and I very much wanted to go with the first group of Lethbridge students to Sapporo the next summer, but we had already graduated and were not eligible. But almost twenty years later, we did get to Sapporo on the faculty exchange. I am now an associate professor with the Department of Theatre and Dramatic Arts at the University of Lethbridge, and my boyfriend from those days is now my husband, Bill Tice. We participated in the spring 2005 faculty exchange with Hokkai Gakuen and I can report that it was well worth the wait!

*シェリー・スコット先生は1986年度(第1回)レスブリッジ大学協力学生として、本学からの派遣学生のお世話をして下さいました。現在はレスブリッジ大学文理学部准教授で、2005年度には教員交換プログラム客員教授として来札し、本学で教鞭をとられました。

2004年度

受入学生

A Summer of Memories (夏の思い出)

Naomi Snelgrove



In summer 2003 I booked a month off work and flew off for a whirlwind adventure in Japan. The short-term exchange program between the University of Lethbridge and Hokkai-Gakuen is a course offered to U of L students who want to go abroad. It offered some preparatory classes and a month of travel. I jumped at the chance. My love affair with Japan had already started during my high school Japanese classes, but little did I know that it was only just truly beginning.

We began by visiting the Kitami campus on the island of Hokkaido. Each student stayed with a host family for eleven days, and my family had a small "farm" outside of the city limits. They grew onions for a cash crop, and had a greenhouse for the family. They were the kindest people I have ever met, and ensured that I was quite comfortable. We toured a bit around Abashiri, and had our first onsen experience.

From Kitami we took a bus across the island, stopping at Sounkyo Onsen for an overnight stay before continuing on to Sapporo. We had a new host family there, just as wonderful and accommodating as our first families. Sapporo is a wonderful city with interesting places to see, visit and shop at.

Besides taking the Japanese language course and lectures on the Hokkai-Gakuen University Campus in Sapporo, we had an evening in Susukino and went to a summer festival in Nakajima Park also. We even learned the lyrics to "Suki Desu, Sapporo!"

At the end of our 11 day stay, we went on to Kyoto and stayed in a traditional ryokan, toured the city, and took the Shinkansen to the Peace Park in Hiroshima. The bomb museum was one of the most moving experiences I can remember.

We were sad to wave goodbye to our beautiful adventure in the Land of the Rising Sun, but I cherish those memories with fondness.

*ナオミ・スネルグロブさんは2003年度にレスブリッジ大学交換学生として本学を訪れ、2004年度は北海学園大学人文学部受入れ交換学生として本学に在籍し勉学に励みました。

1997・2001年度

引率教員①

Hontouni un ga ii

本当に運がいい。

Dayna Daniels

Professor, Kinesiology & Physical Education

University of Lethbridge



From one of the world's youngest countries to one of its oldest... From one of the largest countries in the world to one of the smallest... From a country whose entire population would fit into the city area of Tokyo-Yokohama...I have been so fortunate to experience Japan, Hokkaido, Sapporo and more through the Hokkai Gakuen / University of Lethbridge exchange programs.

I have had the pleasure of bringing two groups of students from The University of Lethbridge to Japan (1997 and 2001). From April to July 1999, I had an amazing experience as an exchange professor at Hokkai Gakuen. Each trip to Japan was unique and exciting. Through the student exchanges, I was able to meet many homestay families in Kitami and Sapporo who showed us kindness and provided some wonderful experiences and a lot of laughter and memories. As the exchange professor I made a

number of wonderful friends, but what became a life changing opportunity was working with twenty-eight Hokkai Gakuen students who made up the women's lacrosse team.

For the most part, University of Lethbridge professors who come to Hokkai Gakuen teach our courses, interact with some of the students, explore Sapporo with other professors, and soak up as much of the beauty and culture of Japan as we possibly can. In my first week in Sapporo I was fortunate to meet, entirely by accident, two members of the women's lacrosse team. When they learned that I had played lacrosse in university, they invited me to come and help the team.

That day began an exciting journey of connection between professor and students. Communicating in Japanese and English with a lot of hand signals and laughter, we learned to work together in a way that lead the team to an undefeated spring season, a first place finish in the Hokkaido University championships, and an undefeated experience at the Japan Universities National Lacrosse Championships on Eta Jima.

As a professor, it is wonderfully satisfying to see my students learn and develop a passion for the materials that I teach. As a person, it was fantastic for me to learn from these women, to share their passion for their sport and to experience my time in Sapporo in a way that had never been done before – or since.

More than a decade has passed since my time as an exchange professor at Hokkai Gakuen. I treasure the friendships that I made while in Japan and I long to return to Sapporo – especially in February for the winter festival. But what warms my heart and makes me smile the most is looking up at the bulletin board above the desk in my office and seeing pictures of the 1999 Women's Lacrosse Team smiling back at me!

*ディナ・ダニエルズ先生は1997年度と2001年度にレスブリッジ大学交換学生引率教員として来札されました。1999年度には教員交換プログラム客員教授として、本学で教鞭を取られました。その間、女子ラクロスクラブの指導もされました。



和室にて茶道体験

Hokkai-Gakuen Essay

Edward Jurkowski

Professor, Faculty of Arts and Science
University of Lethbridge



I was fortunate to represent the University of Lethbridge as a chaperone of fifteen students during the Hokkai-Gakuen exchange during the month of June, 2007. Our one-month excursion took us to three distinct areas of Japan: Kitami (one week), Sapporo (two weeks) and various cities in the Kansai region (one week). There was a wide range in travel experience shared by these students: there were two foreign students among these fifteen; two had never been outside of Alberta; and one had never been on an airplane before.

Each of these three cities brought a different perspective of Japanese landscape, geography, culture and history. Personally, I felt that the chronological order to the cities we visited was most appropriate: with its smaller population and, at times, similar geography to southern Alberta, Kitami was a nice transition to the larger city of Sapporo. Learning about Japanese society in Sapporo—its customs, culture, pace of life and yes, even the food—provided a nice segue to the more established and historically rich cities such as Kyoto, Nara and Hiroshima.

There were obviously many experiences and memories that these students will forever carry with them. However, I would have to say that without doubt that the most far-reaching was the homestay opportunities these students had while in Sapporo. Each student spoke at length about how much these relationships allowed them to understand Japanese culture on a far deeper level rather than as a simple observer. What I found particularly touching is that the students who felt that their home experiences were so profound were spent with Japanese families, who spoke virtually no English whatsoever—in other words, a true immersion of cultures.

In sum, I believe that this exchange represented a profound, life-changing experience for each student. The exchange not only provided these fifteen special young Canadian adults with an incredibly valuable, first-hand understanding of another country, but also the opportunity to serve as ambassadors for the University of Lethbridge and the province of Alberta.

*エドワード・ジャーコフスキー先生(レスブリッジ大学文理学部教授)は2006年度教員交換プログラム客員教授として、本学で教鞭をとられました。2007年度にはレスブリッジ大学交換学生引率教員として再び来札されました。

FOUND IN TRANSLATION:

An Essay Written in Celebration of the 25th Anniversary of the Student Exchange Program Between Hokkai Gakuen University and the University of Lethbridge.

Lance M. Grigg

Associate Professor, Faculty of Education
University of Lethbridge



I would like to begin by thanking the team putting together this 25th anniversary booklet on the Student Exchange Program between Hokkai-Gakuen University and the University of Lethbridge. I am grateful for the opportunity to write an essay celebrating this amazing achievement.

I have been fortunate in being able to participate in both the Professor's Exchange and the Student-exchange programs between Hokkai-Gakuen University and the University of Lethbridge. I first went to HGU on the Professor's Exchange Program in 2002. Just recently, I led the Student Exchange trip in June, 2009.

I've learned so much about Japan, university life at HGU and myself in the process! In learning about Japanese culture, history and literature, I learned a great deal about appetites I had I never knew existed. For example, I didn't know I'd get such pleasure listening to a shamisen or sitting down to a dinner of shabu-shabu. As well, I never thought I'd enjoy riding on a shinkansen or watching kabuki theatre.

I must admit, however, I did have a few lost in translation moments when I first visited Japan in 2002. It was out of these experiences of difference that my appreciation for the diversity of Japanese culture grew. Unless one experiences a culture for oneself, it is very difficult to discern the subtle differences within that culture itself, and to allow them to meaningfully impact one's own perceptions of culture, music, and even life itself.

I remember asking my students, What does one usually expect when one visits a foreign country? A number of their responses seemed to be spot on: hearing people speak a different language, tasting new foods, seeing unique landscapes, experiencing other ways of living and encountering histories that are thousands of years old.

Having participated in two exchanges between HGU and the University of Lethbridge, I can gratefully say, I have been blessed with having experienced all of these things and more. I have learned basic Japanese,

seen my name written in it, tasted exotic foods and seen beautiful scenery that have left me breathless. Whether it was riding on a cable car up the side of a mountain to view the valley below, gazing into an active crater at Mt. Usu or collecting sea shells at the Sea of Okhotsk, I have seen and felt some of the natural beauty of Japan.

Importantly, through these exchange programs I have experienced the culture and beauty of Japan in a way that has changed my life forever. Whether it was walking on a Nightingale floor in Kyoto, visiting the floating shrine at Miyajima or standing in awe before the power of the International Peace Park in Hiroshima, I can say that while I am a citizen of Canada, I am also a citizen of Earth with deep connections across the globe.

Those deep connections are fundamentally with the people I've met on the exchanges. I have met amazing professors, students, teachers, administrators and coordinators. I hope I haven't left anyone out! When I first went to HGU as a professor in 2002, I was introduced to wonderful people who helped me with my courses, took me to amazing restaurants, and drove me to onsen, Shinto shrines, volcanoes and many other unforgettable sites.

More recently, on the student-exchange program (June 2009), I was re-acquainted with those very good friends. I'll never forget seeing them again upon my return. All the great memories, learning experiences and kindnesses seemed to flood back. It was a re-connection in the deepest sense of the word.

On this 25th anniversary of the exchange, I hope and pray other professors and students will continue to benefit from the exchanges. Japan and Canada have so much to share and celebrate together, it is crucial the programs continue. I hope one day to be asked to write an essay celebrating the 50th anniversary of the exchanges! The title of that one might be: Found in Translation (Again)

Again thank you for this opportunity, and congratulations to HGU on the 25th anniversary of the Student-exchange program!

*ランス・M・グリッグ先生(レスブリッジ大学教育学部准教授)は2002年度教員交換プログラム客員教授として来札し、本学で教鞭をとられました。2009年度にはレスブリッジ大学交換学生引率教員として再び来札されました。

ホストファミリー1年生

齋藤 かず子

2007年度レスブリッジ大学交換学生
ホストファミリー

人文学部日本文学学科卒



平成19年5月に北海学園大学より、「カナダレスブリッジ大学からの交換留学生のホストファミリーを引き受けてもらえないか」と一本の電話が有りました。なにぶん外国人と話すほどの英会話は私達夫婦には出来ないでお断りしようと考えていましたが、夫の一言でホストファミリーになることにしました。

その一言は「日本食、日本語、日本文化を伝えよう」でした。

留学生との対面の時、どんな子が我が家に来るのかとドキドキしながら北海学園商科大学の教室で待っているとその中でも際立って身長の高い、顎には髭を蓄えた男子学生でした。我が家までの30分間、車の中で話題を何にしようかと外の風景を見たり彼の顔を覗きこんだり、結局は目の玉だけがキョロキョロしているうちに、到着したことを思い出します。

壊れ物に触るような思いで数日が過ぎましたが、一週間も過ぎると夫と毎日のようにビールを飲み日本語と、英語が飛び交う生活になりました。毎日のように飲むので注意すると、「お父さんと楽しんでいるから、お母さんは黙って!」と実に上手な日本語で口答えまでしてビールや酒を飲み続けていました。

学校に行った後、部屋を覗いて見ると足の踏み入ることの出来ないほどの散らかりようで驚き、帰宅後すぐに注意! 翌日部屋の掃除をする真面目な姿もありました。お客様扱いをしないで子供と同じように怒り又、注意すると同じ家族になれることも良い思い出になり何でも話しあうことも出来るようになり、我が家にはその頃ゴールデンレトリバーがいましたが、学校から帰ってから散歩をしてくれたり、ドックフードを与えてくれたり、食後のお手伝いも沢山してもらいました。

日本の文化にも触れて貰おうと思い、帰宅後は甚平に着替えて庭で夕食を食べ、銭湯に行き、花火をし、生け花、茶道など正座をしながら体験!足が痺れ大きな身体を転ばし畳の上で大声を上げて転がったのが何よりも滑稽でした。

その後機会があり数回留学生を迎えることが有りましたが、肩を張らないでいつもの生活をそのままにして留学生を迎えるようにしています。

何よりも喜ぶのがマーケットに行き買い物をして料理(日本料理)と一緒に作り食べる事と、和服を着たり折り紙をしたり、隣近所へ挨拶がてら訪問、近所の人達も笑顔で迎えてくれて留学生と楽しく話をしてくれる事です。

これからも私達老夫婦がお手伝い出来ればと思っており、留学生と出会う事によって、忘れかけていた日本文化を再認識しました。

夏季海外研修受け入れ事業に
協力学生として参加して

白鳥 亜矢子

2001年度・2003年度レスブリッジ大学
生受け入れ協力学生

人文学部英米文化学科卒

北海道医療大学心理科学部助教(英語教員)



私が北海学園・レスブリッジ大学学生交換事業夏期海外研修に協力学生として参加したのは2001年度および2003年度のことでした。当時、人文学部英米文化学科の学生として本学に在籍していた私には、在学中にカナダへ長期の語学留学をするという、かねてからの夢がありました。英語を通じた実践的なコミュニケーション能力を養うだけでなく、留学生との交流を通じ活字からではなくカナダに関する生きた情報を直接自分の耳で聞きたい、知りたいという強い思いから、留学実現に向けた第一歩として、このプログラムへの参加を決めました。

実際の参加を通じ、得たものの大きさは計り知れず、最初の期待をはるかに超える貴重な財産となりました。記憶に残る出来事は数多く挙げられますが、特に、留学生と一緒に浴衣を着て北海道神宮のお祭りに行き、彼らにとって初めてとなる食べ物を屋台で食べ歩きた日のこと、着物を着てうれしそうに華道や茶道に挑戦する姿を目にした時のこと、家電量販店で日本の最先端の家電製品の数々を目にし、驚きと興奮で店内を走り回る彼らの姿を見た時のこと、札幌ドームで野球の試合を観戦した際に約4万人の大観衆を目の当たりにし、「こんなにたくさんの人を一度に見るのは初めて」と感激した姿、また、その帰り道に満員となった地下鉄の風景を必死になって写真に納める姿を見た時のことなど、鮮明に記憶に残っています。

札幌での滞在期間はわずか10日間程という短い期間でしたが、その一日一日が非常に充実した実りのあるものであったため、空港で彼らの帰国を見送った時の寂しさは今でも忘れることができません。しかし、その経験がひとつの動機づけとなり、さらに英語を上達させたいという思いや、英語圏の文化に対する興味が強くなり、大学卒業後、オーストラリアの大学院に進学することとなりました。そして現在、英語を教える仕事に就くことができ、ひとつの夢が叶えられたと思っています。

このプログラムが今後も末永く続き、一人でも多くの学生が人生において何かを発見するきっかけになることを切に願っています。

2010年度 派遣事業 報告会①

協力学生との交流について 北守有沙 [法学部1年]



報告会の様子

2010年度 学生報告会資料

平成22年度カナダ・レスブリッジ大学 夏期海外研修派遣学生報告会

日 時：平成22年11月27日(土)12:40～(1時間半程度を予定)
 会 場：D41 北海学園大学7号館4階
 発表時間：各グループ15～20分程度
 報告方法：グループごとに写真を用いて発表(パワーポイント使用可)
 使用する写真・PPTデータ提出：11月22日(月)までに北海学園大学庶務課へ

以下のテーマ1、2から1つ、3、と4、から1つを必ず含めて報告してください。
 尚、5、および6、につきましては、全員が一人ずつ発表してください。

- テーマ
- ESLで学習したことについて
 - 課外学習で学んだことについて
 - ホームステイ・ホストファミリーについて
 - 協力学生との交流について
 - 研修全体を通して感じたこと(全員)
 - 今回の研修で学んだこと、経験をふまえて、今後の目標について(全員)
 - その他(1.から6.以外で他に報告したい事項)
- } 必ずこの中から1つを選択
- } 必ずこの中から1つを選択

次 第

挨拶 北海学園大学レスブリッジ大学専門委員長 R.Dキザー
 研修報告 派遣学生グループごとに発表
 質疑応答

その他、不明な点につきましては以下までお問い合わせください。よろしく願い申し上げます。

北海学園大学 庶務課 学術・国際交流担当
 電話：011-841-1161(内線2641または内線2405)

研修中は、協力学生と交流し親睦を深める時間は本当に少なかったように思います。私たちは午前中、ESLの授業を受け、午後は課外活動に出かけていたので、彼らと自由に過ごせる時間は、主に、放課後と土日に限られていました。さらに、彼らの中にはアルバイトや大学の授業の研究等で忙しく、なかなか会うのも難しい学生もいました。ですが、私たちは自分のピアパートナーはもちろんのこと、沢山のピアパートナーと同じ時間を共有し、親睦を深めることができました。それだけでなく、彼らとの会話でカナダの文化を知り、また、彼らの学問に対する意欲やボランティア精神を垣間見ることができました。

ここで少し、協力学生とどのように過ごしたかについて、具体的な話を話したいと思います。私はピアパートナーと休日はカルガリーの動物園に行ったり、ショッピングをしたり、ホストファミリーの家に招待し、ホストマザーが作ったスペシャルサパーを楽しんだりして過ごしました。また、彼女がアルバイトしている姿を見学したりもしました。彼女はいつも明るく、私を気遣ってくれました。そして、いろいろな話題を提供し、笑わせてくれました。彼女の家でパーティをした日には、二人で盛り上がりすぎて気づけば夜中の一時半になっていたこともありました。家には2時に着き、翌日のフープアップデイで彼女と顔を合わせた時に、お互いに「眠い」と言い合っていました。またある時は大勢の学生と共にボーリングに行きました。ある学生から「ビール一杯だけなら運転してもいい」という話を聞いて心底驚かされました。ボーリングでは皆打ち解けて、思いっきり楽しんでいました。全ての日本の学生が、彼らと素晴らしい関係を築けたと思います。

彼らと交流して気付いたことは、先程も述べたように素晴らしいボランティア精神を持っているという事です。彼らは日本では考えられないくらい、他人に対して配慮していました。特に、私たちに対して奢ろうとする場面が数多くあり、遠慮しようとする。「これはカナダでは当たり前のことで、私たちの善意でやっていることなのだから気にしないで」と、さも当然のように言っていました。私は彼らの器の大きさと素晴らしいボランティア精神に感銘を受けたのを、今でも鮮明に覚えています。また、彼らは私たちが滞在している間、少しでもカナダでの生活を楽しんでもらえるように様々な事を企画、提案してくれました。おかげで、私たちはカナダで有意義な生活を送り、素晴らしい時間を享受することができました。また、彼らは自立しており将来の展望もはっきりしている、という事にも気づかされました。特に私のピアパートナーは、一軒家に一人で住み、自分の稼いだお金で買った車を持ち、アルバイトで生計を立て、更には家庭菜園で、ある種の自給自足の生活を送っていました。これは日本の学生には、まずあり得ない事です。そして、明確な将来への展望を持って大学の講義に臨んでいるという姿勢にも感銘をうけました。

彼らとの交流を通じて日本の学生にはない見習うべき一面を発見でき、刺激をうけました。また、国境を越えて彼らと友人になれた事を誇りに思います。研修は終わってしまいましたが、彼らとの交流で得た貴重な経験を大切に、これからの学校生活を送っていきたいと思います。

2010年度 派遣事業 報告会②

派遣事業終了後に、「研修事業を終えて」というアンケートを実施しています。事前研修会・授業内容・課外学習・ホームステイ・協力学生(ピアパートナー)などについての参加者からの声を掲載いたします。

- 事前研修会の自己紹介練習は、とても緊張して嫌でしたが、何度も繰り返すうちに慣れてきて、カナダへ行く頃には自信をもって言えるようになっていました。
- ESLの授業では、毎日パソコンを使って日記を書き、先生が添削してくれたおかげで間違いを確認することができた。
- ゲストスピーカーによる特別講義は、難しかったが良い刺激になった。
- 課外学習では、日本とは違うところをたくさん感じることができ、説明を英語で聞くことでさらに勉強になった。
- レスブリッジは小さな町だが、その良さが十分わかる内容で充実していたと思う。
- Banffの2泊3日は、とても心に残るものであり、日本では絶対に体験できないことだらけであった。
- ホストファミリーは、聞き取れないときは何度もゆっくり根気強く話してくれたので嬉しかったです。部屋も広く料理もおいしかったです。
- ホストファミリーとの別れは悲しかったし、本当の家のような安心感があった。
- ピアパートナーは積極的にコミュニケーションを図ろうとしてくれていた。映画やゴルフに誘ってくれたり、誕生日を祝ってくれたり、とても親切にしてもらった。
- 両親をはじめ、仲間や引率者、担任の先生、レスブリッジ大学関係者、ピアパートナー、ホストファミリーなどたくさんの皆さんに感謝したいと思います。
- 得るものがたくさんあり、人としても成長できる素晴らしいプログラムでした。
- 研修を通してさらに英語や異文化への興味・関心が深まった。



地元のラジオに出演し、英語で日本の音楽を紹介しました



Lake Louise の美しさに感動!



ESL授業では毎日コンピュータを使用し、日記を書いていました

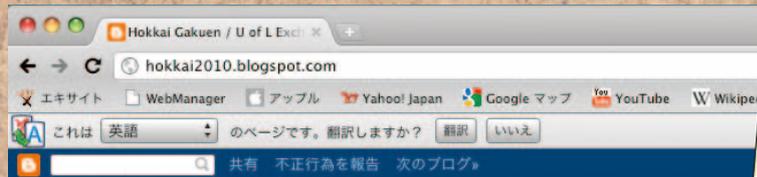


ピアパートナーと初対面



ホストファミリーと日本食レストランへ

平成22年度派遣では、ESL英語授業の一環として担当のDiane先生がブログを作成しました。学生が毎日先生に提供した英語Journalから選んだ文章を、添削後写真と一緒にブログで公開しました。ブログの更新は毎日行われ、札幌では学生の活動の様子を毎日みることができました。



First Day of Banff Trip!! -- August 20, 2010



Today was the first day of our trip. So, everyone was excited.

First, we went to Lake Louise and we went canoeing. It was very fun because it was my first experience. After exploring Lake Louise, we ate spaghetti and lasagna at the Old Spaghetti Factory in Banff. It was very nice but it was too much food!

We had free time in Banff, so

I went shopping with my friends. I bought a lot of souvenirs for my family and friends. And we went to Banff Hot Springs. It was a comfortable place for me.

Chie

Posted by Hokkai Gakuen at U of L at 3:24 PM



2010年度 事業成果報告

2010年度北海学園・レスブリッジ大学学生交換事業引率者
庶務課書記 清永 麻衣子

■ 研修及び出張期間：2010年8月10日～9月4日

■ 研修及び出張の目的：北海学園・レスブリッジ大学学生交換事業引率



レスブリッジ市長主催の昼食会にて、みんなでHeehaw!

● 研修及び出張成果の概要

今回の出張は、北海学園大学11名および北海商科大学4名の学生計15名の引率者として業務を行いました。学園関係者およびレスブリッジ大学の協力により、本プログラムを無事遂行することができました。また、参加学生は滞在中、乗り物酔いなど多少の体調不良はあったものの、病気や怪我もなく、引率者を含め17名全員が無事に帰国できました。

● 出入国等の移動

関係者の万全な準備とJTBの担当者のご尽力により無事移動することができました。往路の成田発バンクーバー行きの出発が遅延したため、バンクーバー到着が1時間程度遅れたものの、前回の反省点をふまえ、乗継接続に余裕のある便を手配していたおかげで、入国審査等も順調に済ませることができました。しかし、カルガリー空港到着が、1時間遅れたことに加え、学生1名のスーツケース破損のため、バゲージクレームセンターにて状況説明および破損証明書を入手するのに時間を要し、レスブリッジ大学到着が1時間半程度遅くなってしまいました。即座にレスブリッジ大学担当者に状況説明の連絡をすることで、ホストファミリーにも到着時刻の遅延を伝えていただき、20:30頃無事に学生とホストファミリーの対面を果たし、ホストファミリー宅へそれぞれ到着いたしました。復路に関しましては、エアカナダの受託手荷物が1人につき23kg以内2つまでという制限がかなり厳格であったため、バンクーバー空港にて超過料金100ドルを支払った学生もいました。この点については、事前研修時にもっと注意を促しておくべきだったと反省いたしました。

● 研修プログラムについて

研修プログラムは、レスブリッジ大学の担当者のご尽力により大変充実した内容となりました。ESLは初日にプレシメントテストを行いました。都合によりクラス分けはされず15名1クラスで授業が行われました。テキストを用いた授業(ライティング、文法)、トイレットペーパーやビーチボールを使うなど学生の興味を引くように工夫された授業の他、簡単なプレゼンテーションやコンピュータを使いながら手紙を書くことや毎日英語で日記をつける課題が出され、日記は、写真と共にESL講師が開設してくださったブログ(<http://hokkai2010.blogspot.com/>)へ公開されるなど多角的かつ継続的に英語に触れる機会を作っていました。また、ラジオ番組へ出演する機会もあり、学生同士ペアになり日本語の楽曲を紹介するという素晴らしい経験もできまし

た。レベルの異なる学生15名が1クラスで授業を受けるよりも、同レベルの学生ごとに授業を受ける方が望ましいと感じましたが、総合的に英語を学習でき、かつ飽きることのないように考慮された授業内容だったと思います。

ゲストスピーカーの授業は、「過労死」「家族」「ロードサイン」を題材とした講義が英語で行われ、ESLとは異なる早さの英語の聞き取りや高度な講義内容に、初回は内容を把握するのにかなり苦戦し、無反応な場面や沈黙が目立ちました。それをふまえ、ESL講師より事前に概要を説明していただいたり、当方からスピーチ担当者や学生全員に積極的に意見・感想・質問等を述べるように促すことで2回目・3回目は自主的に発言する学生も現れ、着実な成果をあげられたように思います。

課外学習では、博物館・消防署・警察署・日本庭園などを訪れ、レスブリッジやカナダの歴史・文化に触れる良い経験となり、行く先々の現地の方々が皆温かく大変感激しました。また、2泊3日のバンフへの小旅行やウォータートンへの日帰り旅行ではカナダの自然を満喫し素晴らしい体験となりました。学生15名が終日共に過ごす時間が長かったため、派遣学生同士の結束がより強まったと思います。特に、Lake Louise、Horse back riding、raftingは好評で日本では経験することのできない広大な自然を満喫し、感動いたしました。

● ホストファミリーについて

ホストファミリーによって家族構成・生活環境が大きく異なるため、それぞれの家庭によって差がありましたが、大きな不満もなく過ごせました。途中、何度かホストファミリー不在のため、別の学生を受け入れているホストファミリー宅に滞在することもありましたが、学生に状況を確認した結果、レスブリッジ大学へ申し出るまでの大きな問題にはなりません。カルガリーやアメリカ、キャンプなどの週末に加え、買い物や食事といった日常を過ごす中で、徐々に英語のみの環境にも慣れていくことができました。

● ピアパートナーについて

前回はピアパートナーの不在が問題となりましたが、出発前から強く担当者に要求していたこともあり、今回は派遣学生15名に対し、19名のピアパートナーに集まっていただきました。サマークラスやアルバイトの都合で、アクティビティに全員が参加することが困難な場合もありましたが、授業後や週末には食事・買い物・映画・ボウリング・カラオケ・バブ・牧場・自宅への招待などできる限り、共に時間を過ごすよう努めてくれたことに本当に感

謝しております。交通機関が非常に不便であるため、たびたび車に乗せてもらうなどピアパートナーには本当にお世話になりました。帰国後の現在もメールやチャット、SNSを通じて連絡をとり、来年度本学に訪れた際には再会を誓うなど彼らの交流が今後継続していくことを心から嬉しく思います。ピアパートナーの募集は非常に困難である時期にもかかわらず、募集及びとりまとめをしてくださったレスブリッジ大学担当者に感謝しております。

●派遣学生について

規律を乱す学生はおらず、全体を通して良い雰囲気でも過ごすことができました。授業の遅刻もほとんどなく滞在中、英語に苦戦しながらもカナダの自然や文化に触れ、レスブリッジの方々と交流を深めることができました。学生自身が担当者やガイドに話すことを躊躇して当方に尋ねる場面が多かったため、直接聞くように何度も促すことがありました。引率者は通訳という立場で同行しているわけではないことをあらかじめ説明しておくべきだったと思いました。体調不良の学生が発生した際は、学生同士で助け合う様子も見られました。お世話になったレスブリッジの方々のために、事前に選曲していた歌をGraduation ceremonyにて披露し、ESL講師やレスブリッジ大学担当者へカードや寄せ書きを準備して感謝の気持ちを伝えました。

時折、目標としてきた英語力への到達に至らないために苦悩する者、ホストファミリーとのコミュニケーションにとまどう者などそれぞれの悩みはありましたが、時間の経過と共に解消されていったように思います。今回の派遣学生はレスブリッジ大学関係者いわく、今までの派遣学生よりも英語のレベルが高いとの評価をいただき、全体的に快活な印象を受けました。英語学習に対する意識の差は確実にありましたが、積極的な学生はできる限り英語を使う機会を増やそうと出発前から外国人教員の研究室を訪問し、滞在中はもちろんのこと、帰国後もさらなる向上を目指して取り組む様子が見受けられました。各学生がこの研修を振り返って、海外や異文化への興味、さらなる留学や将来の夢への挑戦などのきっかけになったと聞き非常にうれしく思います。

●レスブリッジ大学関係者の対応について

レスブリッジ大学の担当職員には、プログラムや引率者の身の回りのことなどあらゆる面で大変お世話になり、対応も親切で非常に良い印象でした。当方の宿舎は、学生寮であったためか電子レンジ・コンピュータ・テレビ・掃除機・ドライヤー・タオル・まな板等がなかったものの時折ハウスキーピングが入り清掃していただき、要求に対してできる限りの対応をしてくださりました。日本と比較すると説明不足や準備不足であることにより、学生から不満の声が上がるがあったため、担当者で直接話す機会を多くもつように心がけていました。

以前本学に交換教授として来札していた方々からは、夕食の招待を受けることが何度もありました。交換教授、その家族と再会できたことは、非常に嬉しく、困ったときにはすぐに助けてくださった彼らの優しさやホスピタリティには本当に感動いたしました。レスブリッジでの生活を快適かつ楽しく過ごすことができたの

も偏に関係者の皆様のおかげであります。交換教授・学生受け入れの際には、本学関係者一同で彼らのような温かいおもてなしができるように努めたいと強く思いました。

●引率業務について

引率業務は、学生の体調確認と連絡事項の伝達、ホストファミリーやピアパートナーとの様子を確認のため、可能な限り学生と行動を共にし、状況把握をするよう心掛けておりました。全てのESLの授業に出席したことで、授業態度や授業内容を直接確認することができて良かったと思います。派遣学生間やピアパートナーとの関係においても注意を払う必要があり、学生やピアパートナーとの対話の中で解決策を考えました。学生と親しく接するだけでなく、注意すべき時は、適切に伝えることも意識しました。その他、出発前に用意していたお土産の品を適宜、関係者にお渡しし、Graduation ceremonyのスピーチ、移動時の点呼・時刻確認やJTBスタッフとのスケジュールや注意事項についての確認業務がありました。

●その他

前回の反省点であるピアパートナーの不在と昼食についての要求を事前に担当者へ何度もお願いし、レスブリッジ大学担当者の多大なるご尽力により、これらの問題は無事解消されました。日本のような詳細な説明や時間の正確さに比べるとおおよその情報で行動しなければならないことに、当初学生は困惑していましたが、後半はそれがカナダの社会であると実感していききました。しかし、ラフティング時の持ち物を正確にお知らせしてもらえず、タオルや着替えがない状態で、全身冷え切ったまま、即バスで移動しなければならない状況には驚き、学生からの不満を受け止めることに大変苦労しました。さすがに体調に関わるため、この時には担当者とその後の対応策を話し合いました。

全体を通して、研修プログラムは大変充実しており、学生および引率者は不自由なく快適に過ごすことができたのもレスブリッジ大学および北海学園の関係者のおかげです。このたび協定校を訪問し、直接研修を経験できたことで多くのことを吸収いたしました。国際交流担当者として、学生への周知や今後の研修のますますの発展に今回の経験を大いに実務に生かしてまいりたいと思う次第です。最後に本事業に引率者として派遣させていただくにあたり、ご尽力いただきました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。



レスブリッジ大学構内

1986



ホストファミリーら関係者と一緒に



JAPANESE EXCHANGE students Takayuki Saito, Yuki Ueda, Hi Chen, Shiro Kato and Hiroshi Taka posed for a picture with their hosts at the University of Lethbridge.

Japanese students enjoying stay

Their stay was very enjoyable and they are looking forward to returning to Japan.

The group of 10 in 20-year-olds, 10 men and five women, are here to study English at the University of Lethbridge.

After just 10 days of a working visit, these English speaking students have already made friends and are enjoying their stay in Lethbridge.

The university's Japanese exchange program is the most popular of its kind in the province. It is a program that has been running since 1970.

Students who are accepted for the program must have a minimum of 12 credits in English and a minimum of 12 credits in Japanese.

Students who are accepted for the program must have a minimum of 12 credits in English and a minimum of 12 credits in Japanese.

Students who are accepted for the program must have a minimum of 12 credits in English and a minimum of 12 credits in Japanese.

地元新聞掲載



レスブリッジ大学協力学生と一緒に



Farewell Ceremony



三味線鑑賞



Farewell Party



清田グラウンドにてBBQ

1987



1988



協力学生と一緒にいった週末旅行、Gladstone鉱山跡にて



レスブリッジ市長主催の歓迎昼食会



乗馬体験



レスブリッジ郊外施設見学

1989



関係者をまじえてのFarewell Party



七夕飾りつけ



レスブリッジ大学受入学生とアクティビティを通じて交流



派遣20周年を記念し、当時の派遣学生と引率者が集まった



Rafter Six Ranch, Alberta



Frank Slide, Alberta



1990

北海学園
受入

1991



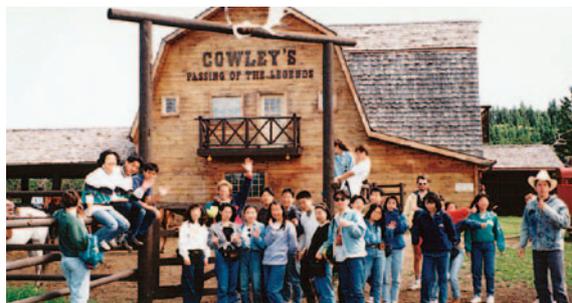
Farewell party



北見滞在記念(北海学園北見大学 茶室にて)



理事長宅にて歓迎会



レスブリッジ郊外施設見学



Head Smashed in Buffalo Jumpにて



Banff Spring Hotelを
バックに



1992



週末旅行昼食



Welcome Party

1993

北海学園
受入



北海学園大学中庭にて茶道体験



体育館にてスポーツを通して学生同士の交流

1994



ホストファミリー・協力学生と野球観戦



レスブリッジ大学をバックに

1995



Farewell Partyにて感謝の意を込めて歌を披露



北海学園大学校舎前にてホストファミリー・協力学生・教職員などの関係者と



1996



スクールバスの前にて



テナント学長宅前にて先住民族衣装を試着



Peer Partnerと一緒に



テナント学長夫妻と

1997

北海道
学園
受入



週末旅行にて



上手に書けたでしょ?



和太鼓体験

1998

レスブリッジ
派遣



乗馬体験



Great Canadian Barn Dance



美しいLake Louiseの前で



レスブリッジ大学構
内体育館にてホッ
ケー体験



大会議室にて学生主催の日本のお祭り体験



初めての和太鼓に興奮!

北海道
学園
受入

1999



Commencement Ceremony



ホストファミリーに感謝



コンピュータラボにてESL授業



ロッククライミング体験



室内ホッケー



ダイナソームジウムにて

2000



北海道庁を訪問



イチゴ狩り



Farewell party



2001



2002



ラフティング



Lake Louise周辺をハイキング



Farewell party

2003



Commencement Ceremony



札幌市表敬訪問



受入学生札幌到着時オリエンテーション



着付け・華道体験



札幌ドームにて協力学生と野球観戦



Head Smashed in Buffalo Jumpにてドラムやダンスのパフォーマンスを鑑賞



Fort Whoop Upにて投げ縄体験



よさこい練習風景



レスブリッジ市長歓迎昼食会



Neuroscience Tour



ゲストスピーカーの授業にて



2004

2005

北海道
受入



札幌ドームにて日本ハムファイターズの試合を観戦



折り紙体験



ホストファミリー宅にて



引率者による関係者を招いての答礼夕食会



Corn mazeの巨大さにびっくり



ホストファミリーとの食事会



Waterton day trip



2006

2007

北海道
受入



コスモスにて歓迎昼食会



受入学生からホストファミリーに感謝をこめて花束贈呈



華道体験

42



バンクーバー自主研修にてバンクーバー水族館を見学



ホストファミリーとのお別れ



焼きマシュマロはカナダならではの体験



レスブリッジ消防署見学にて



PCを使っのESL授業



修了証書授与

レスブリッジ
派遣

2008

2009

北海学園
受入



日本語の授業はみんな真剣!



お餅つき体験

初めて見た北海道神宮御輿行列にびっくり



Peer PartnerとWhoop Up Festivalへ



Peer Partnerとの初対面は少し緊張



Fort Whoop Up にて



ゲストスピーカーによる特別講義



2010

■ 交換学生募集要項



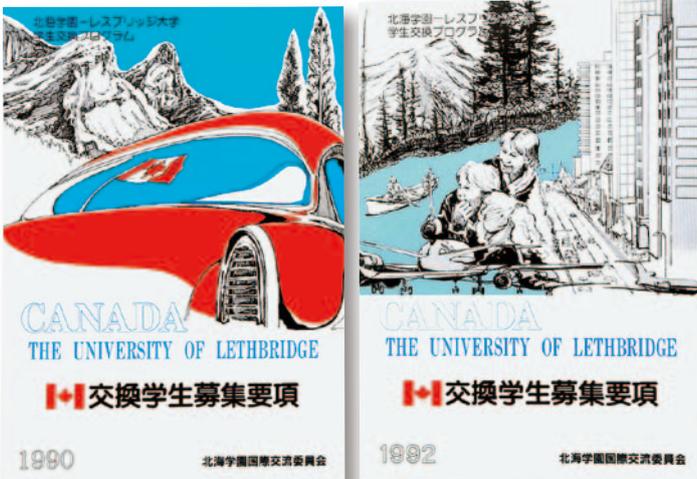
2006年・2008年・2010年



2000年・2002年・2004年



1994年・1996年・1998年



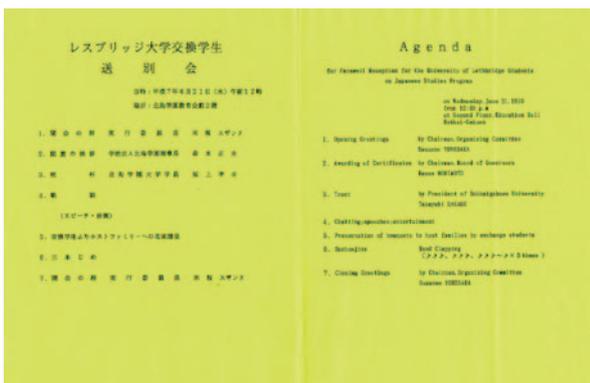
1990年

1992年



1986年・1988年

■ 1995年度 レスブリッジ大学交換学生送別会プログラム



■ 1995年度 レスブリッジ大学 交換学生日本学研修修了式プログラム



■レスブリッジ大学交換学生受入事業の概要

平成9年度レスブリッジ大学交換学生受入れ事業の概要

1. 趣旨と目的
この事業は、学校法人北海学園とカナダ国アルバータ州立レスブリッジ大学との間の協議に基づき対等な協力によって、教育研究の国際化を促進し、相互の国際理解を深めるとともに、日加両国の親善をはかり、今後の産業経済・学術文化の国際交流の場で活躍しうる人材を育成することを主な目的とし、北海学園国際交流委員会のもとにレスブリッジ大学交換学生受入れ協議会を設置し、北海学園大学及び北海学園北見大学（短期大学を含む）の実行委員会が実施する。

2. 事業の経過
この交換事業は昭和61年度に始まり、これまでの実績は次の通りである。

昭和61年度	北海学園大学及び北海学園北見大学（短期大学を含む）の学生15人が8月に1か月間、レスブリッジ大学で英語・カナダ学を研修
昭和62年度	レスブリッジ大学の学生15人が5月から6月にかけて約1か月間、北海学園大学及び北海学園北見大学で日本語・日本学を研修
昭和63年度	北海学園大学及び北海学園北見大学（短期大学を含む）の学生15人が8月に1か月間、レスブリッジ大学で英語・カナダ学を研修
平成元年度	レスブリッジ大学の学生15人が6月から7月にかけて約1か月間、北海学園大学及び北海学園北見大学で日本語・日本学を研修
平成2年度	北海学園大学及び北海学園北見大学（短期大学を含む）の学生20人が8月に1か月間、レスブリッジ大学で英語・カナダ学を研修 （以後、隔年で同様の内容を実施：平成4年度、平成6年度）
平成3年度	レスブリッジ大学の学生15人が6月の約1か月間、北海学園大学及び北海学園北見大学で日本語・日本学を研修 （以後、隔年で同様の内容を実施：平成5年度、7年度）

3. 平成9年度の事業
北海学園大学及び北海学園北見大学において、日本語の基礎的な日常会話を学習し、さらに日本の歴史、地理、経済、社会、芸術など日本の文化と現状を総合的に学習するほか、陶芸、書道などの伝統に体験学習をする。また、文化的施設、国立公園などを見学し、ホームステイや学生、市民との交流を通じて、日本の正しい理解を深めるための機会をもつ。

4. 受入れ期間
平成9年5月27日（火）～6月22日（日）まで（札幌：6月10日～）。

5. 受入れ人員
学生15人（男子9人、女子6人）。他に教職員2人が同行。

6. 研修期間中の宿泊方法
学生はホームステイ、教職員は北海学園の宿泊施設。

7. 費用
学生の往復旅費及び大阪、京都方面における研修旅費はレスブリッジ大学が負担し、北海学園大学及び北海学園北見大学における研修期間中の研修、宿泊、見学、週末旅行に要する費用は北海学園が負担する。

8. 国内傷害保険
北海道滞在中の5月27日から6月22日までの期間、レスブリッジ大学交換学生及び引率教職員のために国内傷害保険を掛けるものとする。

9. 講義
午前中は教室内の講義を中心とし、日本語及び日本学について研修する。

10. 午後研修
午後は市内見学・表敬訪問・交流行事等を主な研修とする。

11. 週末旅行
研修期間中の5月31日・6月1日は道東方面の、6月13・14日は洞爺湖方面の小旅行を実施する。

12. 修了式・送別会
6月7日北見大学において送別会、6月20日北海学園大学において修了式・送別会を実施する。

■ホームステイ引き受けご家族募集

平成9年4月

各位
北海学園大学
北海学園大学実行委員会

ホームステイ引き受けご家庭の募集について

本年5月27日から6月23日までの間、15名のレスブリッジ大学交換学生が日本語研修のために北海学園大学北見大学・同短大（5月27日～6月9日）と北海学園大学（6月10日～同23日）を訪問・滞在の予定であり、これに2名の教職員が引率同行して参ります。このプログラムは、1986年から隔年で本学及び北見大学・短大の学生が、カナダ・レスブリッジ大学においてカナダ研修してきたプログラムにはほぼ対応するものであります。

当北海学園大学では、はるばるカナダから訪れる交換学生を私達日本人家庭に温かく迎え入れ、相互の国際的な交流と親善を深めるため、大学内に実行委員会を組織し、交換学生を受け入れていただけるご家庭を募集しております。外国人を迎え入れるご家庭におかれましても、異なる文化の学生に接し、生活を共にすることを通じて、外国の言葉や習慣を学ぶ良い機会であると思われまます。

つきましては、このような趣旨にご賛同・ご理解をいただき、ホストファミリーをお引き受けいただくにあたっての別紙要領を御覧の上、ホストファミリーをお引き受けご家庭申し込みカードにて、来たる5月2日（金）まで北海学園大学庶務課または学生部（札幌市豊平区旭町4丁目1番40号・電話代表841-1161）までお申し込みくださいますようお願い致します。

なお、お引き受け家庭の決定につきましては、5月中旬ごろまでに、書面でご通知させていただきます。併せて今後の予定をお知らせ致します。

以上

ホストファミリー引き受けご家庭申し込みカード
平成 年 月 日

(ふりがな) 氏名	勤務先 又は職業
住所	電話() -

	氏名	続柄	年齢	勤務先・学校名	趣味	使用できる外国語	海外経験と期間
家							
庭							
欄							

受け入れ希望	希望の性別 男・女・どちらでも	たばこを吸っても	良い・困る
特に何かご希望がございましたらご記入下さい。			

設備	提供できる部屋の広さ	畳間の部屋	室・又は	平方メートル	室				
備	風呂	有・無	シャワー	有・無	トイレ	洋式・和式	その他	ペット	有・無

往復付送の略図	通学の方法・距離・所要時間
	徒歩 往 回～まで、. km 分
	バス ～～まで、. km 分
	地下鉄 ～～まで、. km 分
	市電 ～～まで、. km 分
	バス ～～まで、. km 分
	徒歩 ～～まで、. km 分
	これまでにホームステイ受け入れのご経験がありましたらその回数を記入下さい。 回

2005年(平成17年)10月15日

北海学園大学 学報

第63号

(6)



レスブリッジ大学からの交換生

Message from Dr. Ian MacLachlan and Dr. Diane Clark

On behalf of the fifteen University of Lethbridge students who participated in the 2005 exchange visit to Hokkai-Gakuen University, we thank the faculty of Hokkai-Gakuen who taught our students so much about so many aspects of Japan...

From our viewpoint, this year's exchange was a great success. On an academic level, students gained insight into Japanese culture, improved their knowledge of the Japanese language and developed an understanding of the importance of cross-cultural communication.

All of us at University of Lethbridge are looking forward to welcoming the 2006 exchange students from Hokkai-Gakuen University to Lethbridge next summer. We hope that their visit to the University of Lethbridge and Canada proves as rewarding and enriching as our visit to Hokkai-Gakuen University and Japan has been.

Ian MacLachlan and Diane Clark

Drs. アイアン・マクラクラン先生とダイアン・クラーク先生からのメッセージ

今年度、北海学園大学を訪れた15名のレスブリッジ大学交換学生を代表して、学生たちに日本文化など多岐にわたって教えてくださった教職員のみならず、家族として学生たちを温かく迎え入れてくださったホストファミリーのみならず、そして、学生たちの新しい友人となってくださった協力学生のみならず心から感謝したいと思います。

私たちの感想として思ったことは、今年度の交換学生プログラムはとても充実していて大成功だったと思っています。学生たちはアカデミックな分野では日本文化を学び、日本語についても理解が深まり、異文化の大切さを感じました。

今回の交流がカナダの学生たちにもたらした影響はどんなものだったのでしょうか。交換学生としてのプログラムに参加した学生たちは全員、再び日本を訪れ、増えた友情を育み、日本社会の理解をより豊かなものにしたと思っています。

私たちはみんな2006年度交換学生として来年の夏、北海学園大学からレスブリッジ大学に派遣される学生たちが来るのを楽しみに待っています。そして、北海学園大学の学生たちも私たちが経験したような多くの実りをもたらす経験を得られることを願っています。

Table with columns: 年 (Year), 参加学生数 (Number of Participants), 引率 (Rate), 引率職員 (Staff). It lists exchange program data from 1986 to 2004.

(参加学生数の数字は北海学園大学北見大学の学生)

国際交流で自己と自国の文化を再認識

レスブリッジ大学と北海学園大学の学生交換プログラムは1986年に北海道大学の学生を派遣し、1987年にレスブリッジ大学の学生を受け入れた。隔年で相互訪問、研修してきました。今回、2004年度北海道大学の交換学生を引率してレスブリッジ大学を訪れた。

交換学生としてカナダを訪れた学生たちは、個人的に話す機会が非常に多かった。それは外国の学生たちには日本文化を伝えること、また、自己認識を新たにする経験をしたと語っていました。

交換学生としてカナダを訪れた学生たちは、個人的に話す機会が非常に多かった。それは外国の学生たちには日本文化を伝えること、また、自己認識を新たにする経験をしたと語っていました。

交換学生としてカナダを訪れた学生たちは、個人的に話す機会が非常に多かった。それは外国の学生たちには日本文化を伝えること、また、自己認識を新たにする経験をしたと語っていました。

交換学生としてカナダを訪れた学生たちは、個人的に話す機会が非常に多かった。それは外国の学生たちには日本文化を伝えること、また、自己認識を新たにする経験をしたと語っていました。

論集

【経済論集】 2005年6月 第53巻 第9号 (通巻第61号) 田中 史人・赤石 篤紀

【経営論集】 2005年6月 第3巻 第9号 (通巻第9号) 三浦 京子

学生交流事業20周年 北海学園大学とレスブリッジ大学

本学とカナダのレスブリッジ大学とが、今年度20周年を迎えた。1986年より始まった学生交流事業は、今年度で20周年を迎える。1986年より始まった学生交流事業は、今年度で20周年を迎える。

2005年度のレスブリッジ大学と北海学園大学の交流

2005年度のレスブリッジ大学と北海学園大学の交流は、1986年より始まった学生交流事業の20周年を迎える。今年度は、両大学の学生が互いに訪問し、文化交流を行った。

2005年度のレスブリッジ大学と北海学園大学の交流は、1986年より始まった学生交流事業の20周年を迎える。今年度は、両大学の学生が互いに訪問し、文化交流を行った。

2005年度のレスブリッジ大学と北海学園大学の交流は、1986年より始まった学生交流事業の20周年を迎える。今年度は、両大学の学生が互いに訪問し、文化交流を行った。

2005年度のレスブリッジ大学と北海学園大学の交流は、1986年より始まった学生交流事業の20周年を迎える。今年度は、両大学の学生が互いに訪問し、文化交流を行った。

2005年度のレスブリッジ大学と北海学園大学の交流は、1986年より始まった学生交流事業の20周年を迎える。今年度は、両大学の学生が互いに訪問し、文化交流を行った。

新たな出会いで貴重な体験

ホストファミリー 佐川 敬一 日本人らしい生活に興味を持ち、理解し、それをサポートする。自分自身も新しい文化に触れ、成長する。

自分がある日、日常を送っているという現実に気づき、自分自身も新しい文化に触れ、成長する。新たな出会いで貴重な体験をする。



北海学園大学



レスブリッジ大学

北海学園・レスブリッジ大学学生交換事業〔夏期研修〕

25周年記念誌

発行 2011年(平成23年)3月31日
編集・発行 北海学園大学 平成22年度レスブリッジ大学専門委員会
北海学園・レスブリッジ大学夏期研修25周年記念誌編集部会
編集委員 上野 之江 岡崎 敦男 清永 麻衣子
印刷所 アイワード

北海学園大学

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

TEL:011-841-1161

<http://www.hokkai-s-u.ac.jp/>



University of
Lethbridge

